

姫路市

芝添遺跡

——(一)石倉太子線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書——

平成25(2013)年3月

兵庫県教育委員会

姫路市

芝添遺跡

——(一)石倉太子線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書——

平成25(2013)年3月

兵庫県教育委員会

例　言

- 1 本書は、姫路市太市中に所在する芝添遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 本発掘調査は、(一) 石倉太子線道路改良事業に伴うもので、兵庫県中播磨県民局姫路土木事務所の依頼に基づき、兵庫県教育委員会を調査主体として、兵庫県立考古博物館を調査機関として実施した。出土品整理は、兵庫県教育委員会を調査主体として、公益財團法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部が実施した。
- 3 調査の推移
 - (1) 発掘調査確認調査平成22年10月26日・27日実施機関：兵庫県立考古博物館（遺跡調査番号2010182）本発掘調査平成23年1月7日～2月8日実施機関：兵庫県立考古博物館（遺跡調査番号2010252）工事請負：株式会社高山建設
 - (2) 出土品整理作業平成24年4月1日～平成25年3月31日実施機関：公益財團法人兵庫県まちづくり技術センター
- 4 本書は、公益財團法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部の森内秀造・甲斐昭光が執筆し、編集については非常勤嘱託員杉村明美の協力を得て行った。
- 5 本調査において出土した遺物や作成した写真・図面類は、兵庫県教育委員会（兵庫県立考古博物館）で保管している。
- 6 遺構写真は調査担当者の撮影によるもので、遺物写真については、(株)タニグチフォトに撮影委託した。
- 7 図示した方位はすべて座標北を示し、水準は東京湾平均海水準（T.P）を使用した。座標は世界測地系に基づくもので、調査地は第V系に属する。
- 8 遺物番号の表示は、本文・図版を通して統一した。
- 9 土層等の色調については、小山正忠・竹原秀雄編著「新版 標準土色帖」1992年版を使用した。
- 10 発掘調査及び報告書の作成にあたっては、是川長氏ならびに姫路市教育委員会から御協力や御教示をいただいた。記して感謝の意を表します。

本文目次

第1章 調査の経緯	(森内秀造) 1
第1節 調査に至る経過.....	1
1 調査に至るまで.....	1
2 確認調査の実施.....	1
3 本発掘調査.....	3
第2節 出土品整理作業.....	4
第2章 遺跡の位置と環境	(甲斐昭光) 5
第1節 遺跡の位置.....	5
第2節 遺跡の歴史的環境.....	5
第3章 遺構	(森内) 9
第1節 遺跡の立地と遺構.....	9
第2節 南区 (No 0 ライン～No 4 ライン区間) の遺構.....	9
第3節 中央区 (No 4 ライン～No 7 ライン区間) の遺構.....	10
第4節 北区 (No 7 ライン～No12.5 ライン区間) の遺構.....	12
第4章 遺物	(甲斐) 13
第1節 土器.....	13
第2節 石製品.....	16
第3節 木製品.....	16
第5章 自然科学的手法による分析	17
第1節 芝添遺跡出土土器の胎土分析..... (パリノ・サーヴェイ株式会社)	17
第2節 芝添遺跡における放射性炭素年代 (AMS測定) (株) 加速器分析研究所)	26
第6章 まとめ	29
第1節 弥生時代後期の土器..... (甲斐)	29
第2節 総括..... (森内)	34

挿図目次

第1図	遺跡の位置	1
第2図	確認調査トレーンチ配置図	2
第3図	周辺の遺跡	6
第4図	ピット列	11
第5図	包含層出土石器	16
第6図	各粒度階における鉱物・岩石出現頻度（1）	20
第7図	胎土中の砂の粒径組成（1）	20
第8図	各粒度階における鉱物・岩石出現頻度（2）	21
第9図	胎土中の砂の粒径組成（2）	21
第10図	碎屑物・基質・孔隙の割合	21
第11図	暦年較正年代グラフ【参考】	28
第12図	高杯脚据端部の比較	33

本文写真目次

写真1	調査風景（1）	3
写真2	調査風景（2）	4
写真3	胎土薄片（1）	24
写真4	胎土薄片（2）	25

表目次

表1	試料一覧および胎土分類	17
表2	薄片観察結果	19
表3	測定および測定補正值	27
表4	測定値【参考】	27
表5	西播磨地域における弥生時代後期土器の編年対照表	29
表6	芝添遺跡出土弥生土器の器種構成	30
表7	芝添遺跡出土弥生土器の属性	31
表8	土器観察表	36
表9	石製品・木製品観察表	36

図版目次

図版1	遺構全体図	図版6	SK01～03遺構図
図版2	南区遺構全体図	図版7	SK04遺構図
図版3	SD01・02断面図	図版8	SK01～03出土土器
図版4	中央区遺構全体図	図版9	SK04出土土器
図版5	北区遺構全体図	図版10	溝等出土遺物（SD・SX・包含層）

写真図版目次

写真図版 1	南区全景（南から）	写真図版 9	a) SK04 上層遺物出土状況 (東から)
写真図版 2	a) SD01 遺物出土状況（北から） b) SD01 遺物出土状況（南から） c) SD03 土層（南から） d) SD01・02 b 土層C（南から） e) №0 南壁 土層断面D f) SD02 a・b 土層B（南から）	写真図版10	b) SK04 下層遺物出土状況 (南東から) c) SK04 床面遺物出土状況 (西南から)
写真図版 3	a) SD02 b 土層A（北から） b) SX01（北西から） c) SX01（西から）	写真図版11	a) SK04 完掘状況（東から） b) SK04 完掘状況（北東から） SD05a・b
写真図版 4	中央区北半～南区全景（北から）	写真図版12	c) SD05 遺物出土状況（北から） a) SD05b 完掘状況（南から） b) SD05b 遺物出土状況（東から） c) SD05b 東壁土層（西から）
写真図版 5	a) SK01 遺物出土状況（南西から） b) SK01 遺物出土状況（南から） c) SK02（東から）	写真図版13	写真図版14 SK01・SK03・SK04上層 出土土器 写真図版15 SD01・SD05a・SD05b 出土土器 写真図版16 SK01 出土土器 写真図版17 SK01 出土土器 写真図版18 SK02・SK03・SK04上層 出土土器 写真図版19 SK04上層・SK04下層 出土土器 写真図版20 SK04下層・SD01・SD05a・包含層 出土土器 写真図版21 a) SD05b・包含層 出土土器 b) 包含層 出土石製品 c) SX01 出土木製品
写真図版 6	a) SK03上層 遺物出土状況 (西から) b) SK03上層 遺物出土状況 (西から) c) SK03下層 完掘状況（西から）		
写真図版 7	中央区北半～北区全景（南から）		
写真図版 8	a) ピット列P08～P10検出状況 (北から) b) P02・03 断割り（東から） c) P01 断割り（東から） d) P04 断割り（東から）		

第1章 調査の経緯

第1節 調査に至る経過

1. 調査に至るまで

一般県道石倉太子線は姫路市石倉と掛保郡太子町太田を結ぶ総延長5.124kmの県道である。姫路西バイパス（国道29号）太子・上太田インターチェンジと接続し、主要県道姫路上郡線と国道179号および国道2号を南北に結ぶ。幅員は5mと狭く、このため太子・上太田インターチェンジ開通にあわせて同インターチェンジに接続する区間のみ拡幅工事が行われている。一方、その前後の区間は未整備の状態であり、交通量の増加に対応した道路拡幅が懸案となっていた。

こうした中で、平成22年度に未施工区間のうち北区間（姫路市太市）の拡幅工事が行われることになった。一般県道石倉太子線にかかる埋蔵文化財については、平成14年度に分布調査が行なわれており、その結果、今回の工事対象地区内に埋蔵文化財の包蔵地が含まれていることが報告された。

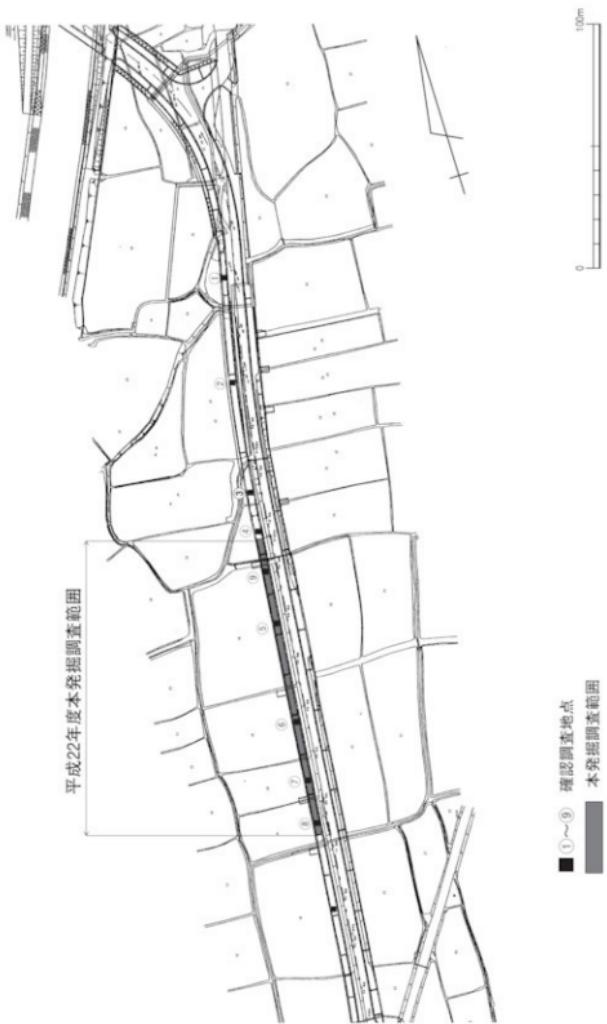
2. 確認調査の実施

一般県道石倉太子線にかかる平成22年度工事予定地内の埋蔵文化財の取り扱いについて、兵庫県立考古博物館と兵庫県中播磨県民局姫路土木事務所との間で協議を行なった。この結果、平成14年度に分布調査の実施により遺物の散布がみられた範囲を対象に、平成22年の秋に確認調査を実施することになった。

確認調査は兵庫県立考古博物館 埋蔵文化財調査部調査第2課（当時）の主査山田清朝が担当し、10月26日・27日の2日間にわたって実施した。調査は県道の西側に沿った約250mにわたる区間に、2m×2mの調査グリッドを9箇所設定し、遺構の有無を確認した。この確認調査の結果、第2図に示したNo.5～No.9の調査グリッドから遺構・遺物が検出された結果をうけて、総延長120mの区間が本発掘調査の対象地とされた。



第1図 遺跡の位置



第2図 確認調査トレーンチ配置図

3. 本発掘調査

平成22年10月の調査結果では遺構・遺物の発見により本調査が必要と判断され、この結果に基づき、姫路土木事務所と再度取り扱いについて協議を実施した。協議では姫路土木事務所より当該年度内に工事を完了したいとの要望が出された。考古博物館では、調査課職員はすでに年度内の予定が決まっており、人員を割くことが不可能であったので、この要望を受けて調査課長職および企画調整課職員が複数交代で本調査に急速対応することにした。このような経過により、本調査は兵庫県中播磨県民局長より平成22年11月15日付中播（姫路）第1590号による依頼に基づいて実施した。

本発掘調査対象区は、総延長125m、幅3mの南北に細長い形状を呈する。本発掘調査の開始が1月初旬となったため、道路拡幅工事の完了が年度内という工期上の制約から、発掘調査期間内に調査区の部分的な引き渡しを姫路土木事務所より要望された。そこで、調査にあたっては、調査区を南（延長60m）と北（延長65m）の2つの地区に分け、南地区側から調査に着手し、調査完了後ただちに姫路土木事務所に引き渡しを行なった。また北地区についても南地区調査完了後に着手し、2月8日に全調査を完了した。

調査期間：平成23年1月7日～2月8日

調査面積：375m²

調査担当 調査第2課長 森内秀造 企画調整課主査 小川弦太・同主任 上田健太郎

調査第1課 臨時職員 柴田妃三光

調査工事請負 株式会社高山建設

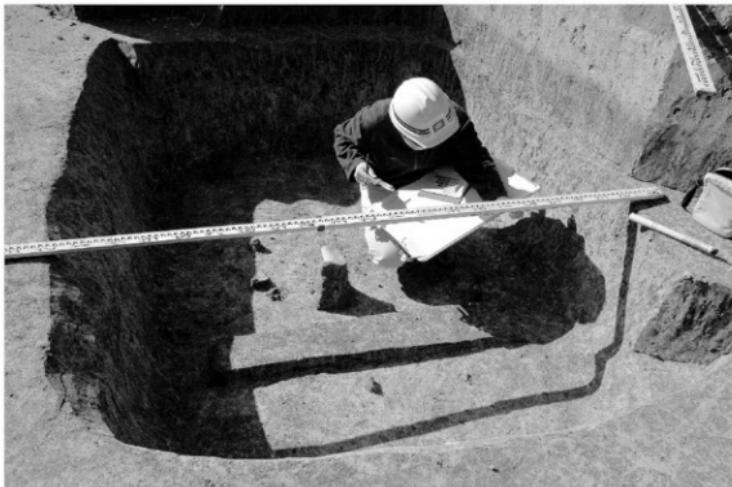


写真1 調査風景(1)

第2節 出土品整理作業

平成24年度に水洗い、ネーミング、接合・補強、実測、復元、写真撮影、写真整理、図面補正、トレース、レイアウト、木器の保存処理、分析鑑定の諸作業を行い、報告書の刊行を行った。

接合・復元作業 萩野麻衣・眞子ふさ恵・吉田優子

実測・トレース・レイアウト作業 杉村明美・高瀬敬子



写真2 調査風景(2)

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 遺跡の位置

太市中地区 芝添遺跡は兵庫県南部の姫路市太市中に位置する。太市中は城山及び馬山の北部を含む範囲であり、北は姫路市西脇及び同相野、同飾西に、東から南東にかけては同青山に、南西は揖保郡太子町上太田に、西は同広坂に各々境を接している。太市中は近世には中村と呼ばれ、姫路藩領、竜野藩領、幕府領等であった。明治初期から太市を冠称し、同24年の戸数は107、人口は466名で、平成24年の戸数160、人口は417名（3月末）である。嘉永年間に始まったという孟宗竹の筍栽培は、明治10年には姫路・竜野方面に出荷するほどになり、現在も農家の副業としてよく知られている。

地 形 大津茂川は、揖保川の盛んな氾濫堆積を受けて形成された同川左岸扇状地の東端に位置する河川である。また、土砂搬出量が揖保川に比べ格段に少なく、馬山・檀特山・朝日山等の基盤岩に連なるため、大津茂川流域は、揖保川本流からの堆積の影響をあまり受けずに河谷が埋め残された地形だといわれている¹。

遺跡の位置 芝添遺跡は大津茂川流域のなかでも、馬山と城山に挟まれた東西200mの幅狭い谷底平野に位置する。この谷底平野は、氾濫原と完新世段丘面からなり、当遺跡は後者に立地する。

第2節 遺跡の歴史的環境

本節では、芝添遺跡(60)の位置する大津茂川流域の旧石器時代から古代までの遺跡の動向を概観する。対象とする範囲は大津茂川流域平野およびその周辺とする。ただし、最上流の約3kmについては、流域に遺跡がないため、対象外とする。記述の便宜上、馬山を含む北方を上流域、南方を下流域と呼ぶ。なお、本書に報告する芝添遺跡は上流域の南端にあたる。

1 旧石器時代

向池遺跡(51)でナイフ形石器等が採集され、亀田遺跡(64)でもナイフ形石器が出土している。

2 繩文時代

下流域の平野部で集落遺跡が知られている。東南遺跡(103)では、後期の竪穴住居、配石墓、土壙墓、埋甕等、晚期の土坑が確認されている。丁・柳ヶ瀬遺跡(132)では中期から晚期までの土器等が、大津茂川床遺跡(113)、坂出遺跡(147)では後・晚期の土器が出土している。

これ以外にも縄文時代の遺跡として、上流域で2遺跡、下流域で5遺跡が知られている。

3 弥生時代

集落 前期については、丁・柳ヶ瀬遺跡(132)で木製彩文高杯をはじめとする遺物が出土している。

中期には遺跡の数は増える。亀田遺跡(64)では、後期初頭にかけての30棟以上の竪穴住居や土器棺墓などが検出され、分銅形土製品、銅劍形石剣などが出土している。川島遺跡(114)では、中期後半の竪穴住居等が検出されている。なお、和久遺跡(146)では、この時期の竪穴住居が検出されている。

檀特山山頂遺跡(117)は中期中葉の高地性集落である。標高約166mの檀特山に営まれ、土器とともに

¹ 高橋 学 1985 「丁・柳ヶ瀬遺跡の地形環境」「丁・柳ヶ瀬遺跡発掘調査報告書」兵庫県文化財調査報告第30冊 兵庫県教育委員会



番号	遺跡の名稱	遺跡番号	番号	遺跡の名稱	遺跡番号
1	打越戸(伊勢原)	030022 - 030027	26	和観遺跡	430108
2	伊勢原	030016	27	御前山遺跡	430121 - 430131
3	伊勢原 9 号墳	030014	28	御前山古墳群	430132 - 430143
4	伊勢原 2 号墳	030015	29	山田遺跡	430167
5	下伊勢原	030017 - 030026	30	山田御山遺跡	430171
6	白石遺跡	030021	31	和田遺跡	430186
7	伊勢原 4 号墳	030022	32	和田大遺跡	430222
8	リゾート 4 号墳	030018	33	子方宮 1 号墳	430232
9	伊勢原 6 号墳	030019	34	子方宮 2 号墳	430234
10	伊勢原山古墳群	030020	35	子方宮遺跡	430234
11	白石六遺跡	130063	36	平丘遺跡	430235
12	シエンタ古墳地帯	030016 - 030018	37	和々上之庄遺跡	430239
13	西谷分水嶺	130062	38	子ノ遺跡	430061
14	福岡今野	030037	39	和々下之庄遺跡	430262
15	無数行古墳群	030038	40	山田遺跡	430263
16	人吉遺跡	030039	41	和田山古墳	430663
17	森山遺跡	030040	42	森山古墳	430664
18	人吉山古墳	030041	43	山田山古墳	430665
19	神利山遺跡群	030042 - 030045	44	丹生山古墳群	430668 - 430676
20	神利山遺跡	030048	45	酒谷古墳	430696
21	打越 2 号墳	030050	46	酒谷遺跡	430697
22	輪ぬ山古墳	030079	47	兼600山古墳群	430707 - 430801
23	神利山遺跡	030071	48	和々子ノ庄遺跡	430800
24	神利山遺跡	030074	49	和々子ノ庄遺跡	430801
25	佐原遺跡	130064	50	森山古墳	430879
26	佐原遺跡	130065	51	森山古墳	430880
27	佐原遺跡	130066	52	森山古墳	430881
28	佐原遺跡	130067	53	森山古墳	430882
29	佐原遺跡	130068	54	森山古墳	430883
30	佐原遺跡	130069	55	森山古墳	430884
31	佐原遺跡	130070	56	森山古墳	430885
32	佐原遺跡	130071	57	森山古墳	430886
33	佐原遺跡	130072	58	森山古墳	430887
34	佐原遺跡	130073	59	森山古墳	430888
35	佐原遺跡	130080	60	森山古墳	430889
36	佐原遺跡	130081	61	森山古墳	430890
37	佐原遺跡	130082	62	森山古墳	430891
38	森谷今子山古墳群	030073	63	森谷今子山古墳群	430892
39	森谷今子山古墳群	030074	64	森谷今子山古墳群	430893
40	森谷今子山古墳群	030075 - 030079	65	森谷今子山古墳群	430894
41	森谷今子山古墳群	030076	66	森谷今子山古墳群	430895
42	森谷今子山古墳群	030077	67	森谷今子山古墳群	430896
43	森谷今子山古墳群	030078	68	森谷今子山古墳群	430897
44	森谷今子山古墳群	030079	69	森谷今子山古墳群	430898
45	森谷今子山古墳群	030080	70	森谷今子山古墳群	430899
46	森谷今子山古墳群	030081	71	森谷今子山古墳群	430900
47	森谷今子山古墳群	030082	72	森谷今子山古墳群	430901
48	森谷今子山古墳群	030083	73	森谷今子山古墳群	430902
49	森谷今子山古墳群	030084	74	森谷今子山古墳群	430903
50	森谷今子山古墳群	030085	75	森谷今子山古墳群	430904
51	森谷今子山古墳群	030086	76	森谷今子山古墳群	430905
52	森谷今子山古墳群	030087	77	森谷今子山古墳群	430906
53	森谷今子山古墳群	030088	78	森谷今子山古墳群	430907
54	森谷今子山古墳群	030089	79	森谷今子山古墳群	430908
55	森谷今子山古墳群	030090	80	森谷今子山古墳群	430909
56	森谷今子山古墳群	030091	81	森谷今子山古墳群	430910
57	森谷今子山古墳群	030092	82	森谷今子山古墳群	430911
58	森谷今子山古墳群	030093	83	森谷今子山古墳群	430912
59	森谷今子山古墳群	030094	84	森谷今子山古墳群	430913
60	森谷今子山古墳群	030095	85	森谷今子山古墳群	430914
61	森谷今子山古墳群	030096	86	森谷今子山古墳群	430915
62	森谷今子山古墳群	030097	87	森谷今子山古墳群	430916
63	森谷今子山古墳群	030098	88	森谷今子山古墳群	430917
64	森谷今子山古墳群	030099	89	森谷今子山古墳群	430918
65	森谷今子山古墳群	030100	90	森谷今子山古墳群	430919
66	森谷今子山古墳群	030101	91	森谷今子山古墳群	430920
67	森谷今子山古墳群	030102	92	森谷今子山古墳群	430921
68	森谷今子山古墳群	030103	93	森谷今子山古墳群	430922
69	森谷今子山古墳群	030104	94	森谷今子山古墳群	430923
70	森谷今子山古墳群	030105	95	森谷今子山古墳群	430924
71	森谷今子山古墳群	030106	96	森谷今子山古墳群	430925
72	森谷今子山古墳群	030107	97	森谷今子山古墳群	430926
73	森谷今子山古墳群	030108	98	森谷今子山古墳群	430927
74	森谷今子山古墳群	030109	99	森谷今子山古墳群	430928
75	森谷今子山古墳群	030110	100	森谷今子山古墳群	430929
76	森谷今子山古墳群	030111	101	森谷今子山古墳群	430930
77	森谷今子山古墳群	030112	102	森谷今子山古墳群	430931
78	森谷今子山古墳群	030113	103	森谷今子山古墳群	430932
79	森谷今子山古墳群	030114	104	森谷今子山古墳群	430933
80	森谷今子山古墳群	030115	105	森谷今子山古墳群	430934
81	森谷今子山古墳群	030116	106	森谷今子山古墳群	430935
82	森谷今子山古墳群	030117	107	森谷今子山古墳群	430936
83	森谷今子山古墳群	030118	108	森谷今子山古墳群	430937
84	森谷今子山古墳群	030119	109	森谷今子山古墳群	430938
85	森谷今子山古墳群	030120	110	森谷今子山古墳群	430939
86	森谷今子山古墳群	030121	111	森谷今子山古墳群	430940
87	森谷今子山古墳群	030122	112	森谷今子山古墳群	430941
88	森谷今子山古墳群	030123	113	森谷今子山古墳群	430942
89	森谷今子山古墳群	030124	114	森谷今子山古墳群	430943
90	森谷今子山古墳群	030125	115	森谷今子山古墳群	430944
91	森谷今子山古墳群	030126	116	森谷今子山古墳群	430945
92	森谷今子山古墳群	030127	117	森谷今子山古墳群	430946
93	森谷今子山古墳群	030128	118	森谷今子山古墳群	430947
94	森谷今子山古墳群	030129	119	森谷今子山古墳群	430948
95	森谷今子山古墳群	030130	120	森谷今子山古墳群	430949
96	森谷今子山古墳群	030131	121	森谷今子山古墳群	430950
97	森谷今子山古墳群	030132	122	森谷今子山古墳群	430951
98	森谷今子山古墳群	030133	123	森谷今子山古墳群	430952
99	森谷今子山古墳群	030134	124	森谷今子山古墳群	430953
100	森谷今子山古墳群	030135	125	森谷今子山古墳群	430954
101	森谷今子山古墳群	030136	126	森谷今子山古墳群	430955
102	森谷今子山古墳群	030137	127	森谷今子山古墳群	430956
103	森谷今子山古墳群	030138	128	森谷今子山古墳群	430957
104	森谷今子山古墳群	030139	129	森谷今子山古墳群	430958
105	森谷今子山古墳群	030140	130	森谷今子山古墳群	430959
106	森谷今子山古墳群	030141	131	森谷今子山古墳群	430960
107	森谷今子山古墳群	030142	132	森谷今子山古墳群	430961
108	森谷今子山古墳群	030143	133	森谷今子山古墳群	430962
109	森谷今子山古墳群	030144	134	森谷今子山古墳群	430963
110	森谷今子山古墳群	030145	135	森谷今子山古墳群	430964
111	森谷今子山古墳群	030146	136	森谷今子山古墳群	430965
112	森谷今子山古墳群	030147	137	森谷今子山古墳群	430966
113	森谷今子山古墳群	030148	138	森谷今子山古墳群	430967
114	森谷今子山古墳群	030149	139	森谷今子山古墳群	430968
115	森谷今子山古墳群	030150	140	森谷今子山古墳群	430969
116	森谷今子山古墳群	030151	141	森谷今子山古墳群	430970
117	森谷今子山古墳群	030152	142	中内遺跡	430973
118	森谷今子山古墳群	030153	143	高坂山遺跡	430974
119	森谷今子山古墳群	030154	144	森谷遺跡	430977
120	森谷今子山古墳群	030155	145	河ノ口遺跡	430974
121	森谷今子山古墳群	030156	146	和久遺跡	430978
122	森谷今子山古墳群	030157	147	御前遺跡	430979
123	森谷今子山古墳群	030158	148	御前遺跡	430980
124	森谷今子山古墳群	030159	149	御前遺跡	430981
125	森谷今子山古墳群	030160	150	御前遺跡	430982

第3図 周辺の遺跡

(参考文献7による。ただし、姫路市内における25・42については、参考文献3及び2による)

銅劍形石劍が出土している。西の片山東山遺跡、南の男鹿島の大山昨神社裏遺跡等が眺望できる。

後期では、和久遺跡(146)で、庄内併行期にかけての堅穴住居約120棟をはじめとする遺構が調査された。多量の土器とともに、銅鏡、碧玉製管玉、ガラス勾玉、土製勾玉、青銅の付着した埴塙等が出土している。土器には、讃岐・阿波・山陰・河内からの搬入品が含まれている。

庄内併行期では、丁・柳ヶ瀬遺跡(132)で堅穴住居2棟が検出されている。これに加え、茶屋ノ前遺跡(65)・亀田遺跡(64)・鶴遺跡(99)・鶴石田遺跡(102)・川島遺跡(114)等の集落遺跡では、丹波・山陰・讃岐系の土器の出土割合が高いことが指摘されており、また、庄内播磨型甕も多いため、姫路市船場川下流域とともにこの甕の生産の中核を担った遺跡が含まれているとも言われる²。なお、逆作遺跡(148)では、吉備地方からの搬入品である特殊壺が出土している。

これ以外にも弥生時代には、上流域で7遺跡、下流域で26遺跡が知られている。

墓 川島遺跡(114)で中期後半の円形周溝墓1基、方形周溝墓3基が、黒岡山墳丘墓(108)で庄内併行期の列石をもつ墳丘墓が知られる。湯ノ谷墳丘墓(45)は、堅穴式石槨を埋葬施設とする。

4 古墳時代

集落 現在のところ下流域で集落遺跡が確認されている。前期では平方遺跡(86)で、中期では川島遺跡(114)において、堅穴住居が検出されている。後期では、鶴石田遺跡(102)で堅穴住居が、亀田遺跡(64)では、堅穴住居5棟や水田とともに、角杯や子持勾玉などの遺物が出土している。

これ以外の古墳時代の集落遺跡として、上流域で6遺跡、下流域で19遺跡が知られている。

前方後円墳 前方後円墳は、上流域にあっては前期の下伊勢西山古墳(10、墳丘長約33m)1基しか確認されていないが、下流域の川島遺跡(114)周辺の平地や山上には多くの前方後円墳が断続的に多数築かれている。前期には、瓢塚古墳(133)をはじめとし、山戸4号墳(129)、鶯山1号墳(77)、檀特山1号墳(118)、同3号墳、檀特山西8号墳(116)の6基が時期を前後しながら築かれ、後期にも小規模ではあるが、薬司古墳(126)、丁1号墳(124)、檀特山西5号墳(116)、山戸12号墳(128)と前方後円墳が採用されるのは大津茂川流域では他にみられない特徴である。このうち山戸4号墳・檀特山1号墳の後円部には讃岐産の大型二重口縁壺が棺として認められており、讃岐地方と関係の深い被葬者が考えられる。なお、瓢塚古墳は讃岐地方の前期古墳との墳形の親縁性が指摘されている³。

前期古墳 前方後円墳以外の前期古墳では、松田山古墳(91)で、堅穴式石槨から斜縁二神二獣鏡、銅鏡、筒形銅器等が出土している。

中期古墳 丹生山1号墳(94)は箱式石棺を主体部とし、墳丘から形象埴輪が出土している。黒岡山古墳(107)では、箱式石棺から出土したという雁龍鏡等の副葬品が伝わっている。

後期古墳 太市中古墳群には、装飾付須恵器や馬具等を副葬する古墳が含まれている。黒岡神社古墳(74)は全長約8.3mと比較的大規模な横穴式石室をもち、家形石棺を納める。

当地域にあっては丁1～3号墳・太市中4号墳において堅穴系横口式石室が採用されている。この種の石室はその後築かれず、播磨の他地域にも認められない。また、いわゆる穹窿式石室と呼ばれる横穴式石室は、旧掛保・飾磨郡に集中し、当地域では、山田大山3号墳(70)、丁山頂古墳(125)、山戸11号墳(128)等が知られている。山田大山3号墳はTK10型式⁴併行、丁山頂古墳はTK43型式併行の築造である。

² 兵庫県教育委員会 2009『鶴石田遺跡』兵庫県文化財調査報告第363冊

³ 岸本直文 1988「丁瓢塚古墳測量調査報告」『史林』71巻6号 史学研究会

⁴ 田沼昭三 1982『須恵器大成』角川書店

終末期古墳 上流域のなかでも古代山陽道(42)の通る広い平野部を有する西脇・太市・相野地区では、西脇古墳群という8支群120基以上からなる大規模な終末期古墳が知られている。また、破磐神社西古墳(39)で巨石を使った横穴式石室が知られる。これより上流では、ドンデン古墳群(12)で、外護列石と横口式石槨をもつ方墳が3基調査されている。

5 古代

本章で取り上げている地域は、播磨国揖保郡の東部にあたり、向山遺跡(49)周辺が邑智里、下太田庵寺(122)周辺が大田里、平方遺跡(86)周辺が枚方里、植特山西側が大家里と考えられている。大田里・枚方里に、揖津国太田村、河内国枚方里からの移住記事、大家里には応神天皇巡幸記事がある⁵。

古代官道と関連遺跡 古代山陽道は大津茂川流域では、太市中の現集落を通っていたと推定されている。向山遺跡(49)は、古代山陽道に南接する遺跡である。8世紀後半の播磨國府系瓦が採集されており、「馬屋田」という小字名も確認され、播磨國風土記載の「邑智駅家」、延喜式記載の「大市駅家」に比定される。また、近接する西脇庵寺(48)からは向山遺跡と同時期の播磨國府系瓦が出土しており、心礎も確認されている。駅長による私設仏堂と推測されている⁶。

古代美作道については、山陽道からの分岐点を大市駅家とする説もあったが、近年は道代の分析等から、一つ東の駅家である草上駅に求める説が有力視されている。

寺院 白鳳時代建立の下太田庵寺(122)は、姫路市教委により実態解明のための発掘調査がなされ、四天王寺式の伽藍配置であること、講堂北側に掘立柱の雜舍群があること等が判明した。

集落 川島遺跡(114)から方形埴輪の掘立柱建物が検出されている。丁・柳ヶ瀬遺跡では、自然流路から墨書き土器等が出土している。芝添遺跡(60)の南200mの段丘に立地する境谷遺跡(61)の旧河道から出土した土器の主体は7世紀から8世紀にかけての須恵器であり、上流の窯跡との関連を考えられる。また、木簡も出土している。龜田遺跡(64)では、帶金具や施釉陶器等が出土した。

これ以外の古代の集落遺跡あるいは散布地として、上流域で6遺跡、下流域で8遺跡が知られている。

窯跡 芝添遺跡東方の桜峠から北方約6kmの間には、7世紀後半から8世紀にかけての須恵器等の窯跡が多数知られ、峰相山窯跡群と総称されている。打越奥山窯跡群(1)、上伊勢1号窯(3)、上伊勢2号窯(4)、西奥谷窯跡(13)、無奥谷窯跡(15)、大谷窯跡(16)、藤谷窯跡(17)、峰相口窯跡群(19)、打越2号窯跡(21)、赤坂窯跡群(34)、觀音寺窯跡群(36)、大池窯跡群(38)、殿清水池窯跡(56)、御坊ヶ山1号窯跡(57)、桜峠窯跡群(58)等が知られている。発掘調査された御坊ヶ山1号窯跡では、役所で使用する円面鏡等の特定器種や上級品も焼かれており、打越窯とともに官窯であったことが分かる。また、赤坂窯跡、打越窯跡、桜峠5号窯では鷹尾も、赤坂窯跡では陶棺も焼成されている。

【参考文献】

- 1 松本正信ほか 1988「考古学からみた太子町」「太子町史」第三巻 資料編Ⅰ 太子町
- 2 高橋美久二 1992「古代山陽道の駅家」「歴史の道調査報告第2集 山陽道（西国街道）」兵庫県教育委員会
- 3 高橋美久二 1994「古代の美作道」「歴史の道調査報告第4集 美作道」兵庫県教育委員会
- 4 中浜久喜 2002「播磨における横穴式石室の構造と変遷」「第2回播磨考古学研究集会の記録 横穴式石室からみた播磨」第2回播磨考古学研究集会実行委員会
- 5 今里幾次ほか 2010「姫路市史」第七巻下 資料編 考古 姫路市
- 6 太子町教育委員会 2004「播磨國鶴莊現況調査報告総集編」
- 7 兵庫県教育委員会 2011「兵庫県遺跡地図」
- 8 角川日本地名大辞典編纂委員会編 1988「角川日本地名大辞典28 兵庫県」角川書店

⁵ 秋本吉郎校注 1958「日本古典文学大系2 風土記」岩波書店

⁶ 今里幾次 2010「西脇庵寺」「姫路市史」第七巻下 資料編 考古 姫路市

第3章 遺構

第1節 遺跡の立地と遺構

調査対象地は県道の西側に沿った水田地帯で、現在の大津茂川左岸の平野部に位置する。調査区の形状および規模は幅（東西）3m、延長（南北）125mの南北に細長い平面形状を呈する。発掘調査段階では調査工程上、No.6地点を境に2つの地区に分けて調査を実施したが、ここでは遺構群の性格の違いから南区・中央区・北区の3つの地区に区分して説明を行う。なお、南北ラインは延長125mを測るが、10mごとに区切りをつけ、南端を起点にNo.0としてNo.12まで設定し、北端をNo.12+5と明示した。また、南北のセンターラインをSNラインとし、これより1m西のラインをSW1ラインとしている。

調査地の現水田面の標高は北地区で15.5m、中地区で15.0m、南地区で14.60mを測り、北から南へと低くなっている。しかし、実際の遺構面の高さは北地区で14.30m、中地区で14.55m、南地区で14.45mを測り、遺構面は中区が最も高い微高地状となっている。従って、集落関係の遺構群は中央区の微高地に集中し、北区は旧河道、南区は小溝群を中心とする。

基本層序は上層から耕土・底土・黄灰色粘土～粘質シルト層（遺物包含層）、黄褐色粘質シルト～極細砂層（地山）となる。

第2節 南区（No.0ライン～No.4ライン区間）の遺構

SD01（図版2・3、写真図版1・2）

北東から南西方向にはほぼ直線的延びる溝である。溝幅は1.5m前後、深さ0.3mで、断面形状はV字形を呈する。調査区内での延長は約19mを測り、調査区南壁側および東壁より調査区外に延びる。堆積土層は粘質シルト～中粒砂混じり粘質シルト層を主体とする。溝底面から7世紀代の須恵器杯身と蓋が出土している。また、埋土中から弥生土器片も出土している。

SD02（図版2・3、写真図版1・2・3）

北東から南西方向にSD01と平行して直線的に延びる溝で、調査区内での延長は約33mである。溝幅2.0m、深さ0.4mを測り、断面形状はSD01と同じくV字形を呈する。

このSD02はNo.2ライン前後でSD02a（東）とSD02b（西）の2つの溝が重なっている。土層堆積ではSD02bがSD02aの埋土層を切っているので、SD02aの埋没後にSD02bが掘削されたことがわかる。SD02bとSD02の関係は別の新旧の溝が切り合っているのではなく、本来同一の溝であり、部分的な掘り直しが行なわれた可能性が高い。堆積土層はSD02a・SD02bともに粘質シルト～中粒砂混じり粘土層を主体とする。なお、SD02aの東肩付近には2つの小溝が取りつく。

SD03（図版2、写真図版1・2）

SD01に開口する幅0.3mの小溝である。SD01の堆積土と同一土層で、切りあい関係は認められず、SD01に向かってラッパ状に開く状況から、SD01に取りつく溝と考えられる。溝底のレベルはSD01の方が約10cm程度深い。

SX01 (図版2・3、写真図版1・3)

SD02の下層から検出された遺構である。遺構の一部が検出されたのみで、遺構の大半は調査区外にあり、全体の形状および規模は不明である。埋土は粘土～粘質シルト層からなり、地山層のブロック塊を含んでいる。底壁断面に杭が6本検出されたが横板材の痕跡は認められなかった。大きな溝の肩口の護岸設備の可能性もあるが、埋土中に地山ブロック塊を含むことなど人為的な掘削を伴っていることから集水施設的な要素もある。

SK02 (図版2、写真図版1)

SD01の東肩を切り込んでいる。遺構の大半の調査区外にあり、遺構の性格は不明である。少量の土師器片が出土している。

第3節 中央区（No.4ライン～No.7ライン区間）の遺構

弥生時代の遺構が集中する地区である。遺構面のレベル高は14.55m前後で、調査区の中ではわずかに高い位置にあり、黄褐色粘土をベースとして土坑群とピットが検出された。

SK01 (図版4・6、写真図版5)

中央区の弥生時代の遺構群集中区の最南端で検出された遺構である。長径（推定）2.55m、短径1.10mの梢円形の土坑で、長軸を北西～北東方向にとる。遺構の検出レベルは最高所で14.46m、底レベルは最低所で14.18mを測り、最深部の深さは0.28mである。底面はほぼ平らである。埋土は褐灰色粘質シルト～極細砂で炭化物を含んでおり、多数の弥生時代後期初頭の土器を含んでいる。土坑底には写真図版5（b）に示したようにほぼ完形に近い高杯（18）が横倒しの状態で検出された。

SK02 (図版4・6、写真図版5)

SK01から北に約11m離れた位置で検出された遺構である。遺構の西半分は調査区外となり、全体の規模は明らかではないが、南北長2.10m、東西の検出長2.60mを測る土坑である。遺構の検出レベルは14.50m、底レベルは14.60mで、深さ0.10mの浅い土坑である。下層は約5cm程度の炭層が堆積している。炭層に混じって少量の弥生時代後期の土器が出土している。底面の一部には被熱酸化面が残る。

SK03 (図版4・6、写真図版6)

SK02と対応の東壁側で検出された遺構である。平面規模は南北長1.45m、東西の検出長0.85mであるが、遺構の東半分は調査区外の道路法面下にあり、遺構全体の規模は不明である。遺構面の検出レベルは14.50mである。埋土層は上下2層に分かれる。第1層は黒褐色極細砂～細砂からなり、レンズ状の堆積を示し、下面から多数の弥生後期の土器と0.5～3cmの炭化物が集中して出土している。第2層は褐灰色粘質シルト～極細砂からなり、遺物の包含はほとんどない。断面は底面が平らで、南壁がほぼ垂直の形状を呈する。底面の検出レベルは14.12mで、検出面からの深度は0.38mである。

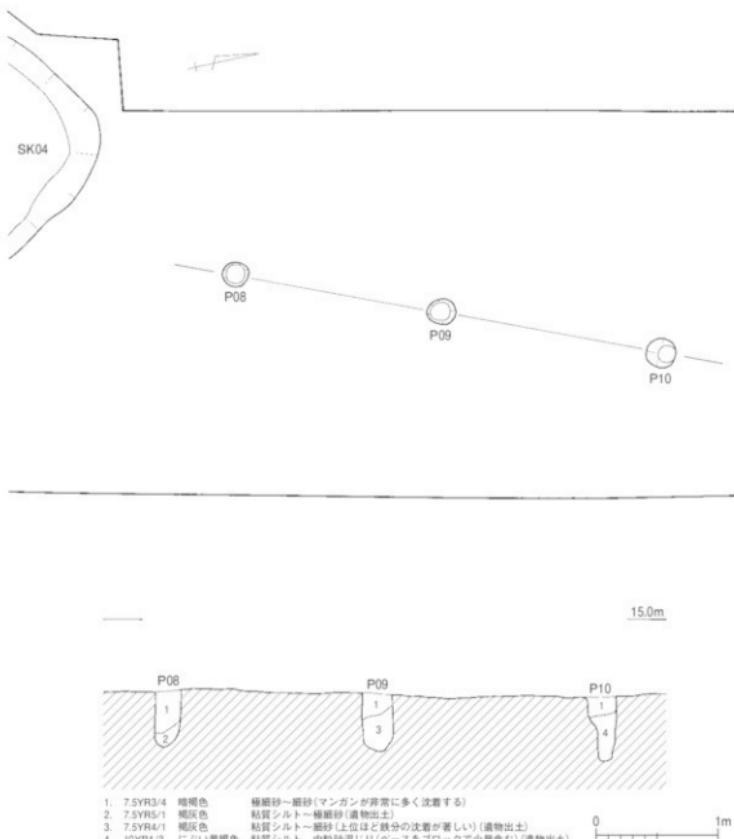
遺構の検出状況からみると、第2層の南壁が本来の遺構形状を示しており、本来は幅1m前後の箱掘りの土坑であったと思われる。第1層は土坑の廃棄後一定期間経過した後にゴミ穴として利用されたと思われる。この状況はSK04と同じである。

SK04 (図版4・7、写真図版9・10)

中央区の弥生時代の遺構群の最北端で検出された長辺2.5m、短辺2.2m、深さ0.60mの方形の竪穴状遺構である。長軸を南西～北東方向にとる。当初の調査範囲では東半分のみの検出にとどまっていたが、

工事用地境界まで調査区の範囲を拡張し、遺構全体の検出を行った。

埋土層はSK03と同じように上下2層に大きく分かれ、上層は黒褐色粘質シルト～極細砂を主体とする埋土層で弥生時代後期初頭の遺物を多く含む。下層は褐色粘質シルト～極細砂を主体とする埋土層で、底面付近から少量の土器片・炭片が出土している。壁面はほぼ垂直で、底面は平坦である。SK03と同じく上層は土坑の廃棄後、一定期間置いた後にゴミ穴として利用されたと思われる。なお、遺構の性格として方形の平面形状および垂直の壁面から墓壙の可能性を考えたが、棺の痕跡が確認できること、底面付近から土器片が少量出土していること、また、ある程度埋まつた段階でごみ穴として再利用されていることなどからその可能性は低い。墓壙よりも貯蔵穴的な用途の可能性のはうが高い。



第4図 ピット列

ピット群（第4図・図版4、写真図版6）

SK02とSK03の南側に4個のピット群とSK04の北側に3個のピット群が検出されている。南側のピット群はまとまりがないが、北側のピット群は1.8m～1.9mの間隔をおいて一直線に並ぶ。但し、これを建物の柱列とすると、組み合う桁行あるいは梁行のピット列が調査区内では発見されておらず、また、ピット断面には柱の痕跡は残されていない。時期も不明であるが、周囲の遺構群はすべて弥生期のものであるので、弥生期のピット群の可能性が高い。

第4節 北区（No.7ライン～No.12.5ライン区間）の遺構

調査区の最も北に位置する調査区で、集落等の遺構は存在せず、弥生時代と古墳時代の河道が検出されている。

SD05a（図版5、写真図版11）

中央区の微高地状の高まりは、No.7ライン付近から北に向かって徐々に下がっており、弥生時代の遺構群の分布はこのNo.7ライン付近までである。No.7ラインから遺構の空白区間において、No.9ラインからNo.11ラインにかけて弥生時代後期の土器を含んだ浅い溝状の遺構SD05aが検出されている。溝の深さは0.8m前後であり、西壁に向かって底面があがっている。堆積土はシルト質で、有機物を含んでおり、川岸の濁水地の様相を呈する。

SD05b北（図版5、写真図版12・13）

調査区を北西から南東方向に流れる幅5.5m前後、深さ0.7mの河道である。埋土層は上層が細粒砂層、中層が細砂・疊層、下層が粗砂を主体とする。遺物は上層から7世紀中頃～8世紀初めの土師器壺が出土しているが、下層は遺物を含んでいないので、下層は古墳時代までに埋没していた可能性が高い。

SD05b南（図版5、写真図版12・13）

SD05aの埋土層を切っている。堆積土は細粒砂層で、SD05b北と同じ堆積土であり、SD05bから続く河道の肩口に当たるものと判断した。7世紀後半～8世紀初めの土師器、壺が出土している。

第4章 遺物

第1節 土器

SK01出土土器（図版8、写真図版14・16・17）

出土したのはすべて弥生土器である。

1は、広口壺a⁷である。やや肥厚させて形成した口縁端面に2条の浅い凹線を巡らせる。凹線は明瞭ではなく、3条に見える部分もある。

2・3は、長頸壺である。2の頸部はやや外傾し、口縁部は端部外面を強くて薄く取める。3の頸部はほぼ直立し、口縁部は丸く取める。頸部外面はハケ仕上げである。

4・5は、無頸壺aである。4は、底部は上げ底であり、体部上端近くに最大径をもつ特徴的な器形である。口縁部は直立気味に短く外傾し、端部を丸く取める。体部最大径付近にヘラ状工具による列点文を巡らせる。体部外面はナデ仕上げ、内面は上半までヘラケズリ、口縁部にはハケを施す。二次的に被熱し、外面が赤色化している。5は、体部からゆるやかに内湾して口縁に至り、端部を薄く取める。外面は縱方向のハケ仕上げである。

6～9・12は、ハケ調整壺aである。12以外は体部が大きく張らない器形である。12のように、口縁端部を大きく肥厚させるものもある。口縁端面はいずれも無文である。内面の調整は、ハケののちヘラケズリを施すものもある（6・8）が、多くはない。ヘラケズリの範囲は体部と口縁部の境にユビオサエ、それ以下にヘラケズリを施すもの（7・12）、口縁部との境付近までヘラケズリを施すもの（9）がある。

14・17は、ミガキ壺である。底部の破片のため、ヘラミガキの範囲は不明である。

10・11は、体部の調整が不明な壺である。10は、口縁部は端をつまみ上げて端面を形成し、そこに凹線を巡らせる。内面は体部と口縁部の境にユビオサエ、それ以下にヘラケズリを施す。11の口縁端面は無文である。内面の調整はヘラケズリである。13・15・16は、壺あるいは壺の底部である。底部の成形は積上げによるとと思われ、充填法を用いる側体は、他の遺構出土土器を含め確認できない。

18は、40と同じ形態の脚部を有する外反口縁鉢である。口縁部は短く外傾し、端部には面を形成する。体部は上位に最大径をもつ。脚部は、円筒状の脚柱部とハの字形に聞く裾部からなり、裾部には2個1組の円孔が2箇所穿たれる。裾端部は上方に小さく拡張する。杯部と脚柱部の接合は円盤充填手法による。体部上半外面にはヘラミガキを施し、裾部内面上端及び柱状部下端にヘラケズリ痕を残す。

19・20は、有稜高杯のうち口縁部が外反するものである。19は、杯部と口縁部の境に段をもつため、いわゆる有段高杯とすべきかもしれないが、各地で後期初頭に出土している有段高杯に比して口縁部が短い点で異なる。杯部以下を欠き、口縁端部をわずかに欠失するが、口縁端部は薄く丸く取める形状ではないと判断できる。20は、中空の脚柱部から杯部にかけての破片と、同一個体と考えられる口縁部小片を図上で復元した。杯部と脚柱部の接合は円盤充填手法によるが、円盤部は剥離している。

21・22は、高杯の脚部である。21は、裾がやや広がる円筒状の脚柱部と、ハの字形に聞く裾部にかけての破片である。脚柱部は6条1単位の櫛描直線文を4帯以上巡らせる。裾部には3個1組の円孔が5

⁷ 器種の呼称は、原則として、長友朋子・田中元浩「2007「西播磨地域の土器編年」（『弥生土器集成と編年－播磨編－』大手前大学史学研究所）の分類に従った。

箇所穿たれる。据部は上方に大きく拡張する。外面はヘラミガキ、内面はヘラケズリを施す。22は、据部からなだらかに中空の脚柱部へ至り、杯部に接合する。杯部と脚柱部の接合は円盤充填手法による。脚柱部から杯部にかけての外面は縦方向のヘラミガキで仕上げる。円孔は3箇所残存するが、いずれも穿つ高さが異なる。

23は、器台bである。筒部からなだらかに口縁部へ至る。口縁端部は上下に肥厚して端面を形成し、そこに凹線を巡らせる。器壁は厚い。口縁部は内外面とも横方向のヘラミガキ、筒部は外面が縦方向のヘラミガキ、内面は横方向のハケメ調整である。

なお、実測していないが、水差の把手の小片が出土している。小神社の堂遺跡出土例（報告番号65）のように壺の肩部につく把手の可能性もある。

SK02出土土器（図版8、写真図版18）

24は、弥生土器の広口壺aの小片である。口縁端部は上下に肥厚させ、端面中央をなでて窪ませる。

SK03出土土器（図版8、写真図版14・18）

出土したのはすべて弥生土器である。

25は、広口壺aである。頭部は口縁端部を上下に肥厚させ、端面に2条の凹線を巡らせる。

26は、ハケ調整壺aである。口縁端面は無文である。外面はタテハケ、内面は体部と口縁部の境以下にヘラケズリを施す。

SK04上層出土土器（図版9、写真図版14・18・19）

出土したのはすべて弥生土器である。

27は、長頸壺である。口縁端部を肥厚させて、やや中央が窪む端面を形成する。

28~30は、ハケ調整壺aである。28は、小型の壺である。口縁端部は面をなす丸く収め、内外面ともハケ仕上げである。29は、口縁端面は無文である。外面はタテハケ、内面は体部と口縁部の境以下にヘラケズリを施す。30は、肥厚させた口縁端面に凹線を巡らせる。外面はタテハケ、内面は体部と口縁部の境にユビオサエ、それ以下にヘラケズリを施す。

34は、ミガキ壺である。底部の破片のため、ヘラミガキの範囲は不明である。

31は、体部の調整が不明な壺である。口縁外面にナデによる窪みがある。口縁端面中央もナデで窪ませる。32・33は、壺あるいは壺の底部である。いずれも内面にヘラケズリを施す。

35は、直口鉢dである。口縁端部に水平な面をもつ。内外面の調整はハケメのちナデである。

36~39は、有稜高杯であるが、口縁が内湾するもの(36・37)、直立するもの(38)、外反するもの(39)に分けられる。36は、体部と口縁部の境の稜が比較的緩やかである。どの個体も口縁部にほぼ水平な端面をもつが、38は、内外に拡張した水平な端面に2条の凹線を巡らせる。37・38は、口縁部外面に凹線を巡らせる。38の胎土は茶褐色で、角閃石を含むことから、器形と考え合わせれば、讃岐産の土器である可能性が高い。

40・41は、高杯の据部の破片である。40は、ハの字形に開く形態から、21と同様、円筒状の脚柱部をもつと推測できる。据部に円孔が1個残存する。外面はヘラミガキである。41は、外面に三角形透孔が形骸化した縦方向のヘラ刻線をもつ。刻線の下端に刺突文を付す。内面調整はヘラケズリである。

この他、壺の頭部の小片が出土している。板状工具の小口を押し当てた三角形の刺突文が巡る。

SK04下層出土土器（図版9、写真図版19・20）

出土したのはすべて弥生土器である。

42は、広口壺aである。口縁部を肥厚させ、口縁端面中央をなでて窪ませる。

43は、広口壺bである。口縁端部を垂下させて形成した端面に円形の竹管文を巡らせる。

44~46・49は、ハケ調整壺aである。44~46は口縁端部を肥厚させ、44は端面に凹線をもつ。44~46の内面は体部と口縁部の境にユビオサエ、それ以下にヘラケズリを施す。49は底部の破片で、内面にヘラケズリを施す。胎土は茶褐色であり、讃岐地域からの搬入品の可能性がある。

47は、小型の壺である。口縁端部は面をなさず太く丸く収める。器壁の摩減が激しいが、内外面ともユビオサエの痕跡が顕著に残る。内面は体部と口縁部の境にユビオサエ、それ以下にヘラケズリを施す。他の壺に比して粗略なつくりである。

50・51は、直口鉢dである。50は、上げ底の底部から外傾する体部に至る。口縁端部には外傾する端面をもつ。51は、半球形の体部から口縁が直立する。口縁直下には1条の凹線を巡らす。2点とも体部外面にはヘラケズリを施す。

SD01出土土器（図版10、写真図版15・20）

52は、弥生土器の壺である。口縁部を下方に肥厚させて端面をつくる。端面は無文である。残存部には内部のヘラケズリは及んでいない。

53・54は、埋土最下層から出土した須恵器蓋および杯である。ともに回転ヘラケズリの範囲は狭く、端部は丸く収める。ともにTK43型式である⁸。

なお、実測していないが、54と同型式の須恵器杯の小片も出土している。

SD02出土土器

実測していないが、奈良時代の須恵器の壺が出土している。水平な端面をもつ口縁部の小片である。

SD05 a出土土器（図版10、写真図版15・20）

出土したのはすべて弥生土器である。

55は、直口壺である。口縁部に端面をもつ。器壁の摩減が著しいが、内面は頸部にユビオサエ、それ以下にヘラケズリを施す。

56は、壺の底部である。突出する平底で、茶褐色を呈するため、河内地方からの搬入品と推測できる。

57は、無頸壺aである。口縁部に2個1組の円孔を2箇所穿つ。

58は、ハケ調整壺aである。上方に肥厚させた口縁端面に凹線を巡らせる。内面は体部と口縁部の境にユビオサエ、それ以下にヘラケズリを施す。

59は、壺口縁部の破片である。口縁部は、上方に肥厚させて口縁端面を形成する。

60は、壺の体部上半以上の破片である。口縁部は、上方に肥厚させて口縁端面を形成する。61とともに、外面にタタキの痕跡をとどめる当遺跡で少ない個体であるが、タタキの上にナデ調整を行っている。内面は体部と口縁部の境にユビオサエ、それ以下にヘラケズリを施す。

61は、直口鉢dである。器壁が比較的厚い。外面はナデ仕上げだがタタキの痕跡が残る。

62・63は、高杯脚部である。器壁が比較的厚い。両者とも直立気味の短い柱状部からなだらかに聞く裾部にいたるが、62は裾部端面をもつに対し、63は端部を丸く収める。63の裾部には等間隔に6個の円孔を穿つ。両者とも杯部と脚柱部の接合は円盤充填手法による。

SD05 b出土土器（図版10、写真図版15・21）

⁸ 田辯昭三 1982『須恵器大成』角川書店

64は、北区南端の埋土下層から出土した須恵器蓋である。TK217型式である。
65は、北区南端から出土した須恵器杯である。底部はヘラ切りである。7世紀後半の所産である。
66は、北区中央付近の埋土上層から出土した須恵器碗である。口縁部は直立し、体部は比較的深い。7世紀後半の所産である。

67は、北区中央付近の埋土上層から出土した土師器甕である。肩は張らず、長い体部をもつ。
68は、北区南端から出土した土師器甕である。長胴、丸底である。内外面ともハケ仕上げである。
なお、実測していないが、強く聞く口縁部と垂直に近い端面をもつ土師器甕の小片が出土している。

包含層出土土器（図版10、写真図版21）

69は、北区の南端付近の遺構検出面から出土した弥生土器の台付鉢である。器壁の摩滅が激しいが、脚部内外面にはユビオサエの痕跡を残さない。製塙土器の可能性もある。
70は、北区の中央付近の遺構検出面から出土した須恵器の杯蓋である。MT21型式である。
71は、中央区の中央付近の遺構検出面から出土した須恵器碗である。底部は突出し、回転糸切りによる切り離しを行う。平安時代頃の所産である。

第2節 石製品

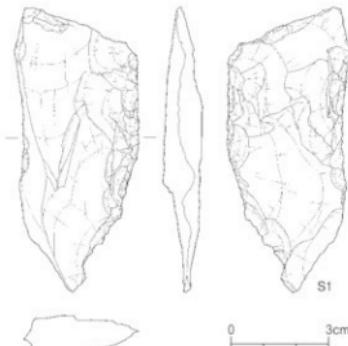
包含層出土石器（第5図、写真図版21）

S1は、包含層から出土したサスカイト製の刃器である。二辺に、連続した平坦剥離による刃部を形成し、一辺に刃潰しを施す。重量35.8gを測る。なお、図化していないが、SK04上層から長さ5.3cm程度のサスカイトの剥片が出土している。

第3節 木製品

SX01出土木製品（図版10、写真図版21）

坑底に打ち込まれた3点の杭である。
W1は、ミカン削材の心側を削りとった、断面台形の角材を利用している。下端を粗く削って細くし、柾目面には手斧による加工痕を残す。アカガシ亜属に特徴的な放射状組織がみられる。W2は、ミカン削材を用いた断面三角形の角材を利用している。下端を粗く削って細くし、柾目面の1面には手斧による加工痕を残す。アカガシ亜属に特徴的な放射状組織がみられる。W3は、広葉樹の心持ち材を用いる。残存長20.9cm、最大径5.6cmで、下端を削って尖らせる。



第5図 包含層出土石器

第5章 自然科学的手法による分析

第1節 芝添遺跡出土土器の胎土分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

今回の分析調査では、播磨平野西部を流れる大津茂川左岸に分布する狭小な沖積低地上に位置する芝添遺跡から出土した弥生時代後期初頭とされる弥生土器について、その材質（胎土）の特性を明らかにし、その生産や供給事情に関わる資料を作成する。特に今回の試料には、地元産と搬入の区別が発掘調査所見により示されていることから、これらの所見と胎土との対応関係あるいは既存の地質資料から推定される地域性などを検討する。

1 試料

試料は、芝添遺跡から出土した、弥生時代後期初頭の土器片6点である。器種の内訳は、壺と甕が2点ずつ、鉢と高杯が各1点である。壺については、1点が地城不詳の搬入品の可能性がありとされ、1点は河内産の搬入品の可能性があると考えられている。また、高杯については讃岐産の搬入品の可能性があると考えられており、甕2点と鉢についてはいずれも地元産と考えられている。

各試料には報告番号および実測番号が付されており、これらを一覧表にして表1に示す。

表1 試料一覧および胎土分類

通番号	報告No.	実測No.	器種	遺構	時期	分析意図	胎土分類	
							鉱物・岩石	粒径組成
1	4	28	壺	SK01	弥生時代後期初頭	地城不詳の搬入品の可能性	F7	1
2	6	26	甕	SK01	弥生時代後期初頭	地元産の可能性	F7	3
3	8	21	甕	SK01	弥生時代後期初頭	地元産の可能性	F7	3
4	18	71	鉢	SK01	弥生時代後期初頭	地元産の可能性	F7	2
5	38	48	高杯	SK04上層	弥生時代後期初頭	讃岐産の搬入品の可能性	C10	3
6	56	16	壺	SD05 a	弥生時代後期初頭	河内産の搬入品の可能性	B	3

胎土分類 F7：岩石片では凝灰岩が多く、流紋岩・ディサイト・変質岩・珪化岩および火山ガラスを伴う。

C10：岩石片では花崗岩類が多く、流紋岩・ディサイトを伴い、氷晶片では斜長石と角閃石が多い。 B：角閃石の鉱物片が非常に多い。

1：粗粒砂をモードとする。 2：中粒砂をモードとする。 3：細粒砂をモードとする。

2 分析方法

当社では、これまでに兵庫県内各地の遺跡より出土した土器の胎土分析には、松田ほか（1999）の方 法を用いてきた。これは、胎土中の砂粒について、中粒シルトから細繊までを対象とし、粒度階ごとに砂粒を構成する鉱物片および岩石片の種類構成を調べたものである。この方法では、胎土中における砂の含量や粒径組成により、土器の製作技法の違いも見出すことができるため、同一の地質分布範囲内にある近接した遺跡間での土器製作事情の解析も可能である。したがって、単に岩片や鉱物片の種類のみを捉えただけでは試料間の胎土の区別ができないことが予想される、同一の地質分布範囲内で作られた土器の胎土分析には、松田ほか（1999）の方法は適当である。以下に試料の処理過程を述べる。

薄片は、試料の一部をダイヤモンドカッターで切断、正確に0.03mmの厚さに研磨して作製した。観察

は偏光顕微鏡による岩石学的な手法を用い、胎土中に含まれる鉱物片、岩石片および微化石の種類構成を明らかにした。

砂粒の計数は、メカニカルステージを用いて0.5mm間隔で移動させ、細躰～中粒シルトまでの粒子をポイント法により200個あるいはプレパラート全面で行った。また、同時に孔隙と基質のポイントも計数した。これらの結果から、各粒度階における鉱物・岩石別出現頻度の3次元棒グラフ、砂粒の粒径組成ヒストグラム、孔隙・砂粒・基質の割合を示す棒グラフを呈示する。

3 結果

観察結果を表2、第6～10図に示す。これまでの兵庫県下の遺跡出土土器胎土分析において設定した鉱物片および岩石片の種類構成による胎土分類では、A類からN類までの種類が設定され、さらに、各種類について副次的な鉱物や岩石の種類によって細分もしている。今回の結果も、その基準に従って分類する。

鉱物片および岩石片の組成をみると、地域不詳の搬入品の可能性があるとされた報4実28と地元産の可能性があるとされた報6実26、報8実21、報18実71の計4点の試料は、ほぼ共通した特徴を示している。その特徴は岩石片の組成において凝灰岩を主体とすることであり、これに伴って流紋岩・デイサイト・変質岩、珪化岩および火山ガラスが含まれることである。なお、凝灰岩と流紋岩・デイサイトは結晶質のものが多く、珪化岩は、珪化流紋岩または珪化凝灰岩とされるものが多い。これまでの分類では、岩石片組成において凝灰岩を主体とするものはF類に相当する。F類については、F1類からF6類まで細分しているが、今回のような凝灰岩以外に多種類の岩石片を伴う組成はF6類としている。ただし、F6類の岩石片の中には、今回のF類の試料には全く認められなかった堆積岩類も含まれていることから、今回のF類は、F6類とは区別してF7類とする。

讃岐産の可能性があるとされた報38実48の試料は、岩石片が全体的に少量であるが、その中では花崗岩類がやや多いとみることができるから、ここでは花崗岩類を主体とする組成であるC類に分類する。その場合、流紋岩・デイサイトの岩石片を作り、鉱物片では斜長石と角閃石が多いという特徴が捉えられることから、これまでのC類の細分類におけるC10類に分類される。

河内産の可能性があるとされた報56実16の試料は、角閃石の鉱物片が突出して高いことが特徴である。このような組成は、これまでの分類ではB類に相当する。

次に各試料の砂分全体の粒径組成では、モードを示す粒径をみると、地域不詳の搬入品の可能性があるとされた報4実28は粗粒砂であり、地元産の可能性があるとされた試料の中の鉢である報18実71は中粒砂である。これら以外の4点の試料は、いずれも細粒砂をモードとする。したがって、分類としては、粗粒砂をモードとする1類、中粒砂をモードとする2類、細粒砂をモードとする3類という分類ができる。

碎屑物・基質・孔隙の割合では、碎屑物の割合がいずれの試料も30%前後を示し、その中で特に分類することはできない。

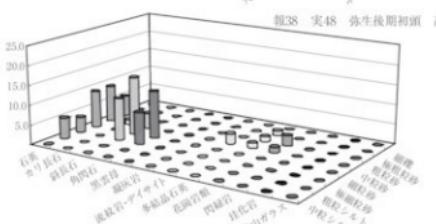
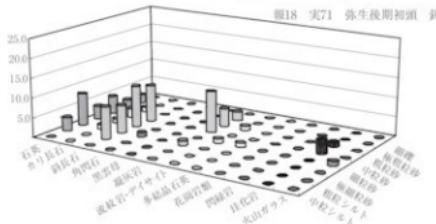
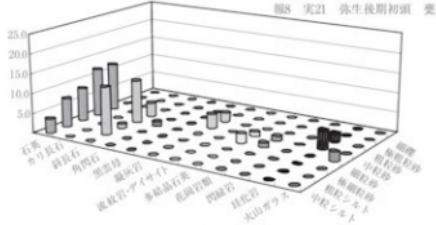
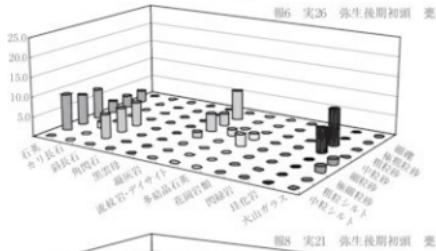
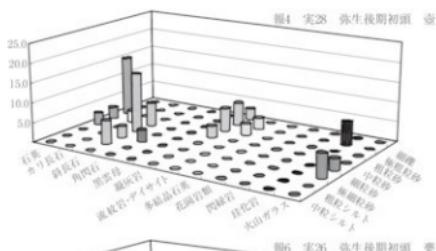
以上に述べた各試料の鉱物・岩石組成、粒径組成における各分類結果は、一覧にして表1に併記する。

4 考察

今回の分析では、地元産の可能性があるとされた試料が3点ある。地元すなわち芝添遺跡周辺の堆積物は、大津茂川流域に分布する地質に由来すると考えられるが、山元ほか(2000)によれば、芝添遺跡よりも上流側の大津茂川流域には、流紋岩質の凝灰岩からなる中生代白亜紀の相生層群の伊勢層が分布

表2 薄片観察結果

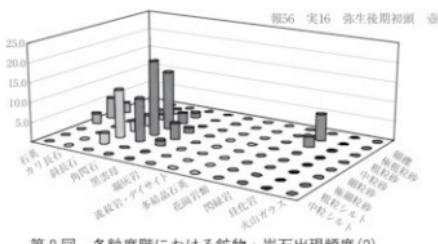
試 料	砂 粒 分 類	薄 片 の 種 類 別 成 分										合 計	
		鉱 物 片		岩 石 片		その他の 種類は ガラス							
		石英	長石	斜 長 石	角 閃 石	矽 利 石	黑 云 母	透 輝 石	透 長 石	多 晶 石	花 崗 岩	閃 长 石	
第4 実28 共生後期初頭 基 礫	砂 粒 分 類	細理					1						1
		極粗粒砂					2	1					5
		粗粒砂	5				2	1					8
		中粒砂	1	1	2								5
		細粒砂			5								7
		極細粒砂			1	1							4
		粗粒シルト			2								3
		中粒シルト											0
		基質											314
		孔隙											14
第6 実26 共生後期初頭 基 礫	砂 粒 分 類	備考	基質は玄母物質で褐色を示す。火山ガラスはパブルウォール型。凝灰岩は結晶質、鍾乳石、チタン石あり。										
		細理									1		1
		極粗粒砂	2				5				1		8
		粗粒砂					2				6		10
		中粒砂	2				3	1	1	1	4		12
		細粒砂	5	4			1	2			1		13
		極細粒砂	5	1	4						1		11
		粗粒シルト	6	4									10
		中粒シルト											0
		基質											403
第8 実21 共生後期初頭 基 礫	砂 粒 分 類	孔隙											23
		備考	基質は淡褐色土状物で埋められ、セリサイトが散在。珪化岩は、珪化流紋岩など、硅化巖は結晶質なものが多い。火山ガラスはパブルウォール型。角閃石は弱酸化しており、融成温度は800°Cに近い。										
		細理											0
		極粗粒砂											0
		粗粒砂	2				2			1	2		5
		中粒砂	10	3			3	1	1	1	4		23
		細粒砂	10	9	1			2	1			2	25
		極細粒砂	7	1									8
		粗粒シルト	6	10							2		18
		中粒シルト	3										3
第18 実71 共生後期初頭 路 端	砂 粒 分 類	基質											508
		孔隙											15
		備考	基質は淡褐色土状物で埋められ、セリサイトが散在。珪化岩は、珪化流紋岩など、硅化巖は結晶質なものが多い。火山ガラスはパブルウォール型。試料表面付近の角閃石は弱酸化しており、融成温度は800°Cに近い。										
		細理											0
		極粗粒砂	2				2			1			5
		粗粒砂	2	1			4	1			1		9
		中粒砂	4	2	8		9			1	3		27
		細粒砂	3	1	9			1	1			1	16
		極細粒砂	7	1	6	1		1					16
		粗粒シルト	3	7								1	11
第38 実48 共生後期初頭 高 杯	砂 粒 分 類	中粒シルト											0
		基質											481
		孔隙											10
		備考	基質は褐色粘土状物で埋められる。凝灰岩、流紋岩は結晶質。珪化岩は、流紋岩、凝灰岩が原岩と見られる。チタン石あり。弱酸化した角閃石がごく微量認められ、融成温度は800°Cに近い。										
		細理											0
		極粗粒砂	4	1					1				1
		粗粒砂	7	1	3			2	1	1			8
		中粒砂	7	11	9								15
		細粒砂	3	8	6	1							27
		極細粒砂	4									1	5
第56 実16 共生後期初頭 基 礫	砂 粒 分 類	粗粒シルト											0
		中粒シルト											6
		基質											317
		孔隙											9
		備考	基質は黒雲母質で、褐色を示す。流紋岩はガラス質。ハブルウォール型火山ガラスあり。										
		細理											0
		極粗粒砂		1	1					5			7
		粗粒砂	2	1	2				2				7
		中粒砂	4	2	11	1							18
		細粒砂	2	2	14	3							21
		極細粒砂	9	8	1								18
		粗粒シルト		2									2
		中粒シルト											0
		基質											215
		孔隙											9
		備考	基質はシルトが多く、セリサイトが散在する。四緑岩は、花崗四緑岩—石英四緑岩。酸化角閃石があり。角閃石の大部分は弱酸化の状態となっていることから融成温度は800°C以上。										



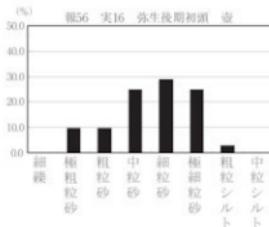
第6図 各粒度階における鉱物・岩石出現頻度(1)



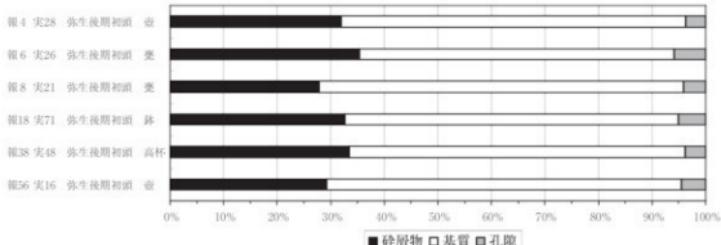
第7図 胎土中の砂の粒径組成(1)



第8図 各粒度階における鉱物・岩石出現頻度(2)



第9図 胎土中の砂の粒径組成(2)



第10図 碎屑物・基質・孔隙の割合

し、さらに上流側の源流域にはデイサイト質の凝灰岩からなる相生層群の夢前層が分布する。したがって、芝添遺跡周辺の堆積物は、主に凝灰岩に由来する岩石片や鉱物片から構成されていると考えられる。分析結果では、地元産とされた試料はいずれもF7類に分類されたが、その組成の特徴は、凝灰岩を主体とする岩石片組成であり、併存する岩石片も流紋岩・デイサイトや凝灰岩を原岩とする珪化岩などであった。この組成は、ほぼ相生層群のみが分布する芝添遺跡より上流の大津茂川流域の地質と一致することから、F7類は芝添遺跡周辺の堆積物に由来する胎土である可能性が高いと考えられる。なお、F7類の中に含まれる火山ガラスについては、これまで市之郷遺跡や飯田遺跡における胎土分析報告で述べているが、その由来は相生層群からなる丘陵の谷間や周縁に形成された山麓緩斜面堆積物（山元ほか、2000）中に含まれるテフラであると考えることができる。

地域不詳の搬入品の可能性があるとされた報4実28も、地元産とされた試料と同様のF7類に分類されたことから、同様に地元産である可能性が高いと考えられる。

これまでの胎土分析事例の中には、芝添遺跡から大津茂川に沿って4kmほど下流に位置する丁・柳ヶ瀬遺跡から出土した弥生時代前期および中期の土器の分析事例がある（矢作・石岡、2009）。結果は、前期の土器も中期の土器も花崗岩類の岩石片を主体とし、堆積岩類や凝灰岩および流紋岩・デイサイトなどが混在するC4類やC5類といった胎土が多くを占めた。これらC類を構成する花崗岩類の由来は、芝添遺跡の東側に分布する桜山貯水池を開む丘陵を構成する桜山岩体であると考え、C4類やC5類は、丁・柳ヶ瀬遺跡における地元産である可能性が高いとした。芝添遺跡は桜山岩体に対してや上流側に位置することから、その周辺の堆積物では花崗岩類の岩石片の混在する割合が低くなっていると考えることができる。現時点では、時期の異なる土器の分析事例の比較であるが、今後、桜山岩体に対して上

流側と下流側との遺跡間で同時期の土器の胎土を比較することがあれば、至近の距離であっても比較的明瞭に両遺跡間の土器胎土の違いが識別され、例えば両遺跡間の土器の移動に係わる資料となることが期待される。

讃岐産の搬入品の可能性があるとされた報38実48は、凝灰岩の岩石片が認められないこと、流紋岩・ディサイトもガラス質であり、結晶質であることを特徴とする相生層群の流紋岩・ディサイトに由来するものではないと考えられることから、地元産である可能性はほとんどないと言える。次に、讃岐産である可能性について、讃岐地域の地質とC10類とした胎土との比較をしてみる。牧本ほか（1995）や松浦ほか（2002）により讃岐地域の地質を概観すると、讃岐山脈は中生代白亜紀後期の堆積岩類からなる和泉層群により構成され、山脈の北麓には領家帯の花崗岩類が分布し、讃岐平野には、領家帯の花崗岩類と新第三紀中新世の讃岐層群の安山岩や流紋岩・ディサイトの溶岩とからなる丘陵が散在している。したがって、讃岐平野という範囲でみても、場所によりこれらの岩石片の組み合わせやその量比は様々であると考えられ、現時点ではC10類が讃岐産であるという特定はできない。ただし、C10類で認められた岩石片は、いずれも讃岐平野を取り巻く地質を構成する主要な岩石であることから、讃岐産である可能性を否定するものでもない。実際に讃岐平野で出土した土器の分析事例を得た上で比較検討することが必要であると考えられる。

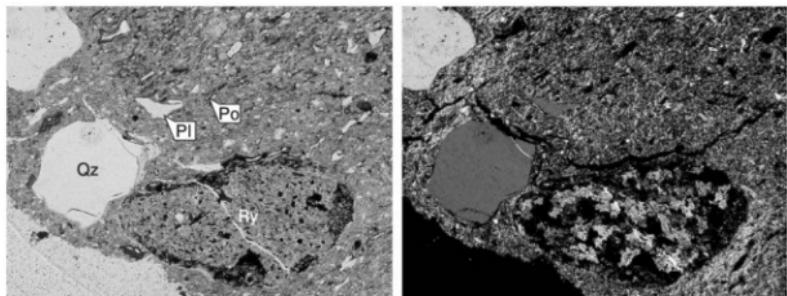
河内産の搬入品の可能性があるとされた報56実16についても、凝灰岩が全くみとめられないことから地元産である可能性はないと考えられる。また、これまでの胎土分析事例においては、B類の胎土とされた試料は、河内産の可能性があるという所見が付されていることが多かった。しかし、今回の試料では、角閃石に伴性する岩石片が閃緑岩のみという点において、河内産である可能性が高いとはいえない。河内平野の堆積物すなわち生駒山地の地質に由来する堆積物を考えた場合、生駒山地を構成する主な岩石は領家帯のはんれい岩と花崗岩類である（生駒山地領家帯研究グループ、1986）ことから、それらの岩石片が堆積物中には混在していると考えられる。今回の試料の胎土中に認められた閃緑岩は、鏡下の観察から花崗閃緑岩～石英閃緑岩に推定されるが、領家帯の花崗岩類の特徴とされる変形構造が認められない。したがって、胎土中の閃緑岩は領家帯の花崗岩に由来するものではない可能性が高い。胎土中には他の岩石片が認められなかったことから、胎土が由来する堆積物中にも領家帯の花崗岩類が全く混入していない可能性がある。そのような堆積物の分布は生駒山地周辺では考えにくいことから、報56実16が河内産である可能性は高いとは言えない。現時点では、この閃緑岩の由来を播磨平野周辺域で特定することはできない。播磨平野周辺域で領家帯以外の花崗岩類を考えるならば、播磨平野より西側の岡山県や広島県の瀬戸内沿岸に広く分布する山陽帶の花崗岩類があげられる。これら地域の弥生土器に関する考古学所見も考慮した上で可能性のある地域を想定し、分析による検討をする必要があると考えられる。

【引用文献】

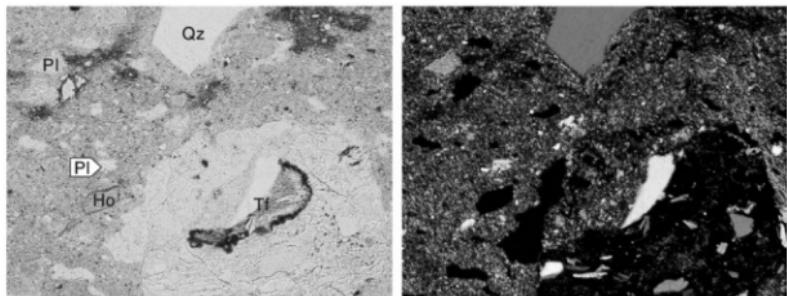
- 生駒山地領家帯研究グループ、1986. 生駒山はんれい岩体について. 地球科学, 40, 102-114.
- 牧本 博・利光誠一・高橋 浩・水野清秀・駒澤正夫・志和龍一、1995. 20万分の1地質図幅「徳島」. 地質調査所.
- 松田順一郎・三輪若葉・別所秀高、1999. 瓜生堂遺跡より出土した弥生時代中期の土器薄片の観察－岩石学的・堆積学的による－. 日本国文化財科学会第16回大会発表要旨集, 120-121.

- 松浦浩久・栗本史雄・吉田史郎・斎藤文紀・牧本 博・利光誠一・巖谷敏光・駒澤正夫・広島俊男,
2002, 20万分の1 地質図幅「岡山及丸龜」, 産業技術総合研究所地質調査総合センター。
- 矢作健二・石岡智武, 2009a, 丁・柳ヶ瀬遺跡出土土器の胎土分析, 兵庫県文化財調査報告 第350冊
姫路市 丁・柳ヶ瀬遺跡Ⅱ 都市計画街路網干線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書,
兵庫県教育委員会, 16-29.
- 山元孝広・栗本史雄・吉岡敏和, 2000, 龍野地域の地質, 地域地質研究報告 (5万分の1図幅), 地
質調査所, 66p.

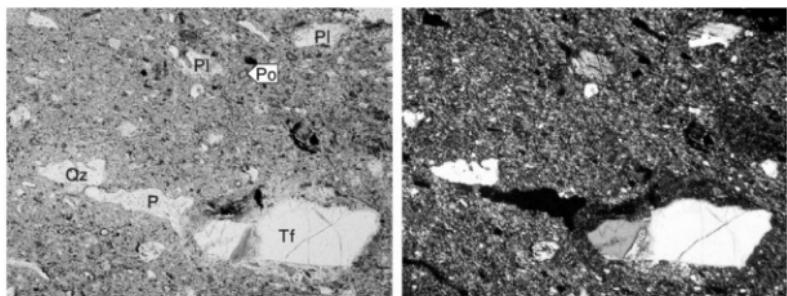
写真3 胎土薄片(1)



1. 報4 実28 (壺 SK01 弥生後期初頭)



2. 報6 実26 (壺 SK01 弥生後期初頭)

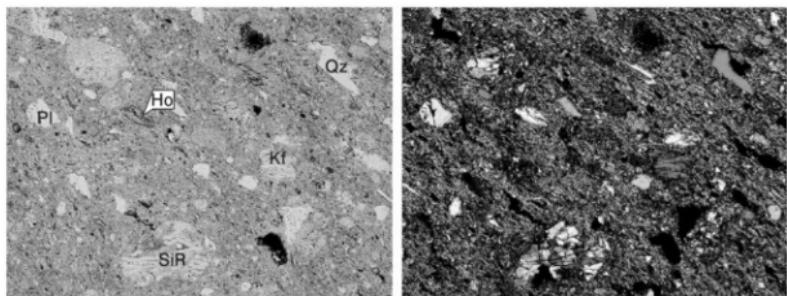


3. 報8 実21 (壺 SK01 弥生後期初頭)

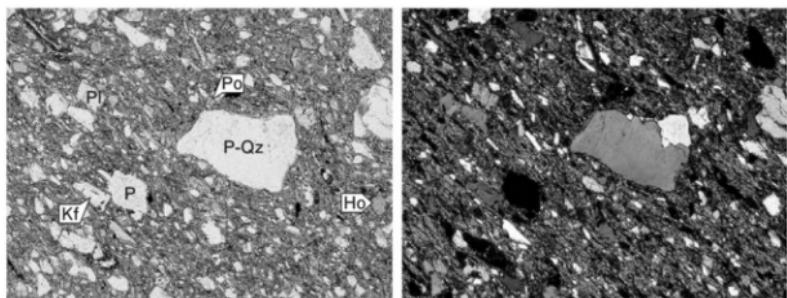
Qz:石英. Pl:斜長石. Ho:角閃石. Tf:凝灰岩. Ry:流紋岩. Po:植物珪酸体. P:孔隙.
写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

0.5mm

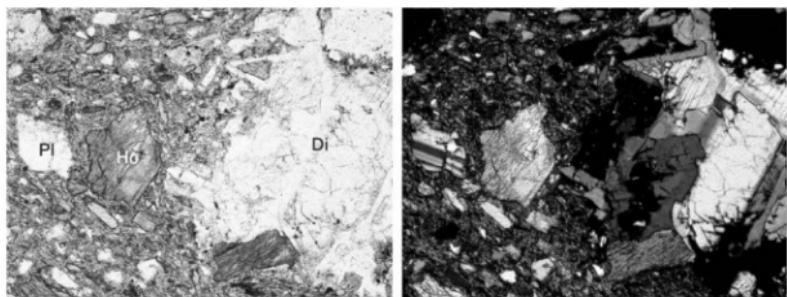
写真4 胎土薄片(2)



4. 報18 実71 (鉢 SK01 弥生後期初頭)



5. 報38 実48 (高杯 SK04上層 弥生後期初頭)



6. 報56 実16 (壺 SD05a 弥生後期初頭)

0.5mm

Qz:石英, Kf:カリ長石, PI:斜長石, Ho:角閃石, P-Qz:多結晶石英, Di:閃綠岩.

SiR:珪化岩, Po:植物珪酸体, P:孔隙.

写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

第2節 芝添遺跡における放射性炭素年代（AMS測定）

(株) 加速器分析研究所

1 測定対象試料

芝添遺跡は、兵庫県姫路市太市中（北緯 $34^{\circ}51'20''$ 、東経 $134^{\circ}36'17''$ ）に所在する。測定対象試料は、SK01出土木炭（1:IAAA-120628）、SK04最下面層出土木炭（2:IAAA-120629）の合計2点である（表3）。

2 測定の意義

遺構の年代を特定する。

3 化学処理工程

- (1) メス・ピンセットを使い、根・土等の付着物を取り除く。
- (2) 酸-アルカリ-酸（AAA: Acid Alkali Acid）処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常 1 mol/l (1 M) の塩酸 (HCl) を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム (NaOH) 水溶液を用い、0.001Mから1Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が1Mに達した時には「AAA」、1M未満の場合は「AaA」と表3に記載する。
- (3) 試料を燃焼させ、二酸化炭素 (CO_2) を発生させる。
- (4) 真空ラインで二酸化炭素を精製する。
- (5) 精製した二酸化炭素を鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト (C) を生成させる。
- (6) グラファイトを内径1mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

4 測定方法

加速器をベースとした ^{14}C -AMS専用装置（NEC社製）を使用し、 ^{14}C の計数、 ^{14}C 濃度 ($^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$)、 ^{14}C 濃度 ($^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$) の測定を行う。測定では、米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸 (HOx II) を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

5 算出方法

- (1) $\delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素の ^{13}C 濃度 ($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$) を測定し、基準試料からの差を千分偏差 (%) で表した値である（表3）。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。
- (2) ^{14}C 年代 (Libby Age : yrBP) は、過去の大気中 ^{14}C 濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年 (0yrBP) として過る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期（5568年）を使用する (Stuiver and Polach 1977)。 ^{14}C 年代は $\delta^{13}\text{C}$ によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表3に、補正していない値を参考値として表4に示した。 ^{14}C 年代と誤差は、下1桁を丸めて10年単位で表示される。また、 ^{14}C 年代の誤差 ($\pm 1\sigma$) は、試料の ^{14}C 年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。
- (3) pMC (percent Modern Carbon) は、標準現代炭素に対する試料炭素の ^{14}C 濃度の割合である。pMCが小さい (^{14}C が少ない) ほど古い年代を示し、pMCが100以上 (^{14}C の量が標準現代炭素と

同等以上）の場合Modernとする。この値も $\delta^{13}\text{C}$ によって補正する必要があるため、補正した値を表3に、補正していない値を参考値として表4に示した。

(4) 历年較正年代とは、年代が既知の試料の ^{14}C 濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の ^{14}C 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。历年較正年代は、 ^{14}C 年代に対応する較正曲線上の历年年代範囲であり、1標準偏差 ($1\sigma = 68.2\%$) あるいは2標準偏差 ($2\sigma = 95.4\%$) で表示される。グラフの縦軸が ^{14}C 年代、横軸が历年較正年代を表す。历年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}\text{C}$ 補正を行い、下一番を丸めない ^{14}C 年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、历年較正年代の計算に、IntCal09データベース (Reimer et al. 2009) を用い、OxCalv4.1較正プログラム (Bronk Ramsey 2009) を使用した。历年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表4に示した。历年較正年代は、 ^{14}C 年代に基づいて較正 (calibrate) された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」(または「ca BP」) という単位で表される。

6 測定結果

試料の ^{14}C 年代は、SK01出土木炭1が $1990 \pm 20\text{yrBP}$ 、SK04最下面層出土木炭2が $2040 \pm 30\text{yrBP}$ である。历年較正年代 (1σ) は、1が $37\text{cal BC} \sim 48\text{cal AD}$ 、2が $91\text{cal BC} \sim 2\text{cal AD}$ の間に各々複数の範囲で示され、弥生時代中期から後期頃に相当する（小林2009）。

試料の炭素含有率は、2が60%弱の十分な値であったが、1は42%とやや低い値となっている。1は土を完全に除去できなかったことが目視でも確かめられており、若干注意を要する。

表3 測定および測定補正値

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-120628	1	SK01	木炭	AaA	-23.95 \pm 0.27	1,990 \pm 20	78.01 \pm 0.20
IAAA-120629	2	SK04 最下面層	木炭	AaA	-24.53 \pm 0.44	2,040 \pm 30	77.56 \pm 0.24

[#5200]

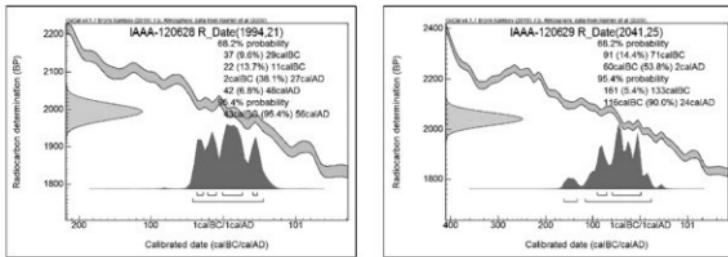
表4 測定値[参考]

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		历年較正用 (yrBP)	1 σ 历年年代範囲	2 σ 历年年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-120628	1,980 \pm 20	78.18 \pm 0.20	1,994 \pm 21	37cal BC-29cal BC (9.6%) 22cal BC-11cal BC (13.7%) 2ca BC-27cal AD (38.1%) 42cal AD-48cal AD (6.8%)	43cal BC-56cal A (95.4%)
IAAA-120629	2,030 \pm 20	77.64 \pm 0.23	2,041 \pm 25	91cal BC-71cal BC (14.4%) 60cal BC-2cal AD (53.8%)	161cal BC-133cal BC (5.4%) 116cal BC-24cal AD (90.0%)

[参考値]

【文献】

- Bronk Ramsey C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates. *Radiocarbon* 51(1), 337-360
 小林謙一 2009 近畿地方以東の地域への拡散. 西本豊弘編. 新弥生時代のはじまり 第4巻 弥生農耕のはじまりとその年代. 雄山閣. 55-82
 Reimer, P. J. et al. 2009 IntCal09 and Marine09 radiocarbon age calibration curves. 0-50,000 years cal BP. *Radiocarbon* 51 (4), 1111-1150
 Stuiver M. and Polach H. A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data. *Radiocarbon* 19 (3), 355-363



第11図 歴年較正年代グラフ [参考]

第6章　まとめ

第1節 弥生時代後期の土器

播磨地域の弥生土器の編年研究については、近年、森岡秀人・荒木孝治が学史の整理を行い¹、長友朋子・田中元浩による、弥生時代前期から庄内式期までの西播磨地域²を見通した編年案も提示された³。それまでの西播磨地域の弥生時代後期土器については、周世入相遺跡（赤穂市）⁴、小神辻の堂遺跡（たつの市）⁵、東有年・沖田遺跡（赤穂市）⁶等の報告に伴って編年試案が示されてきたものの、後期前半期に属する土器の少なさも相まって、いまだ研究が深化されているとは言いがたい。それぞれの併行関係は、概ね表5のとおり整理できる。

今回の芝添遺跡の調査では、SK01及びSK04等からV期1段階⁷（弥生時代後期初頭）に分類できるであろう土器群が比較的まとまって出土した。西播磨地域では小神辻の堂遺跡で当該時期の土器が初めて出土して以来の資料である。特にSK04では、間層を挟んだ上下からそれぞれ一括資料を得ることができた。以下で、これら資料の時間的な位置づけ及び地域的特徴に触みたい。

1 時期の検討

当遺跡出土の弥生土器を当地域の既存の編年案のなかに位置づけるため、V期1段階・同2段階⁸に示された以下の指標⁹が、当遺跡の弥生土器にどの程度認められるのかを確認する。

【西播磨V期1段階の指標】

器種

1：細頸壺がない（岸本）¹⁰。

2：長頸壺が出現する（長友・田中）。

3：高杯A（有棱高杯）が出現する（岸本）。小型の有棱高杯が出現する（長友・田中）。

器形

4：壺B（広口壺b）の口縁端部は上方に拡張しない（岸本）。

表5 西播磨地域における弥生時代後期土器の編年対照表

長友・田中 2007	中田 2003	岸本 1998	甲斐 1990
西播磨V期1段階（後期初頭）	小神辻の堂遺跡21・満	西播磨後期Ⅰ古相	
西播磨V期2段階（後期前半古相）	東有年・沖田遺跡竪穴住居1	西播磨後期Ⅰ新相	
西播磨V期3段階（後期前半新相）	周世入相遺跡土坑22	西播磨後期Ⅱ古相	周世Ⅰ式
西播磨V期4段階（後期後半古相）	東有年・沖田遺跡土坑40	西播磨後期Ⅱ新相	
西播磨V期5段階（後期後半新相）		西播磨後期Ⅲ古・新相	周世Ⅱ～V式
庄内式期			

¹ 森岡秀人・荒木孝治 2007 「播磨地域における弥生土器編年研究の沿革素描」「弥生土器集成と編年－播磨編－」 大手前大学史学研究所

² 本稿では、概ね市川流域から千種川流域にかけてを西播磨地域と呼ぶ。

³ 長友朋子・田中元浩 2007 「西播磨地域の土器編年」「弥生土器集成と編年－播磨編－」 大手前大学史学研究所

⁴ 甲斐昭光 1990 「弥生後期土器の編年」「周世入世遺跡」 兵庫県教育委員会

⁵ 岸本道順 1998 「播磨弥生後期前半土器の実態と編年」「小神辻の堂遺跡」 龍野市教育委員会

⁶ 田中宗伯 2003 「弥生時代後期土器の検討」「東有年・沖田遺跡」 赤穂市教育委員会

⁷ 長友・田中の時期区分名を採用する。

⁸ V期2段階は、岸本がV期1段階との間に「明確な線はまだ引けない」としながらも型式学的検討によって設定した段階であったが、その後、東有年・沖田遺跡竪穴住居1資料がこの段階に当てられている。岸本の設定した後期I新相とは内容が多少異なる点に注意が必要である。

⁹ 注3・4・5文献に示された属性はそれぞれ完全に一致しておらず、また「指標」として示されたものではないが、ここでは最大公約数的にとりあげ、検討の基準とする。

¹⁰ 岸本は長頸壺も見られないとしたが、その後姫路市和久遺跡SH21で出土したため、削除する。

- 5 : 壺は器壁が厚く、粗化する（岸本）。壺・壺の器壁は薄い（長友・田中）。
- 6 : 有棱高杯の杯部は浅く、明瞭に屈曲し、口縁端部が肥厚する（吉備地域の影響）（長友・田中）。
- 7 : 高杯には、外反し端部を丸く収める口縁部（後期通有）はない（岸本）。
- 8 : 高杯に筒状の脚柱部（近畿系）がある（岸本）。ハの字に開いた据部の上に柱状部を付け足す脚部がこの時期に集中する（長友・田中）。
- 9 : 高杯軸端部の拡張が弱い（長友・田中）。

成形・調整

- 10 : 壺の体部外面の調整は、タタキメはほぼ見られず、ハケやナデ、ハケナデが多い（岸本）。壺外面はタタキの上からハケ調整するが、下半部のミガキを省略するもの、ミガキが肩部まで及ぶもの等、バラエティーがある（長友・田中）。
- 11 : 壺の体部内面の調整は、頸部直下までのヘラケズリがほぼ100%となる（岸本）。壺内面は肩部までケズリ調整するものが多くなる（長友・田中）。
- 12 : 高杯の脚部内面のヘラケズリは、据部内面だけではなく、柱部にも横方向に施される（長友・田中）。
- 13 : 椭形高杯は口縁部外面を削って仕上げる作りの粗いものである（長友・田中）。

施文

- 14 : 壺A（広口壺a）の口縁部に棒状浮文及び円形浮文が見られず、退化した刻みや無文となる（岸本）。
- 15 : 壺A（広口壺a）の頸部にB種凹線文がみられない（岸本）。
- 16 : 壺の口縁は拡張肥厚させ、A種凹線文が一定量見られる（吉備地域と共通）（岸本）。壺・壺・高杯等の口縁部に凹線文による装飾が残存する（長友・田中）。
- 17 : 高杯脚部にヘラ描き継線や非貫通透かしが多用される（吉備地域と共通）（岸本）。

【西播磨V期2段階の指標】

器種

- a : 壺D（広口壺a）のうち頸部が筒状になるもの）が出現する可能性がある（岸本）。
- b : くの字形口縁と体部外面にタタキメを施す壺が皆無である（田中）。
- c : 高杯F（外反する口縁部の端部に面をもつもの）が出現する（岸本）。

器形

- d : 壺は頸部が縮まり、体部が球体化する（長友・田中）。
- e : 壺の頸部の屈曲が不明瞭になる（長友・田中）。
- f : 高杯A（有棱高杯）の上端部が水平もしくは内傾する（岸本）。
- g : 有棱高杯が大型化し、口縁部が外反する（長友・田中）。
- h : 口縁部を丸く収める外反口縁高杯が出現する（田中）。

成形・調整

- i : 高杯の脚部は付加法によるもので、据部がより広がる（長友・田中）。

施文

- j : 壺A・B（広口壺a・b）の口縁加飾は、A種凹線文のみ（岸本）。
- k : 壺口縁端部のA種凹線文が減少する（岸本）。
- l : 高杯脚柱部に柳描直線文を施すものある（吉備地域と共通）（岸本）。

上記の指標と当遺跡出土の弥生土器を照合した結果が表6・7である。表6は遺構ごとの器種構成を示し、表7はそれぞれの土器の属性を示す。

表6・7から、当遺跡出土の弥生土器は、V期1段階（後期初頭）の指標に一致する個体が多く、V期2段階（後期前半古相）の指標に一致しない個体が多いことが分かる。

表6 芝添遺跡出土弥生土器の器種構成

形式	壺							甕			鉢			高杯		
	広口壺	壺口 (岸本)	広口壺b	縦唇壺	長唇壺	直口壺	水差	無唇壺a	不明	ミカキ壺	ハケ調 タタキ壺	直・縦 肩部	外反口 縫目	直口縫目	有棱高杯	高杯F (岸本)
SK01	1				2.3		○	4.5	14.17	6~12		13.15.16	18		19.20	21.22
SK02																
SK03	25											26				
SK04上層					27				34	28~30		31~33	35	36~38	39	40.41
SK04下層	42		43							44		40~49	50.51			
SK05a						55		57	56				59	61		62.63
指標との 合致		指標aに 一致		指標1 に一致		指標2 に一致					指標a に一致				指標3 に一致	指標c に 一致

※数字は、本報告書で使用した遺物番号

表7 芝添遺跡出土弥生土器の属性

報告番号	遺構名	器種	指標 (一致:○、不一致:×、不明・非対象:-)																		
			西播磨V期1段階										西播磨V期2段階								
			4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	17	d	e	f	g	h	i
1	SK01	広口壺 a	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	○	-
2		長頸壺	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
3		無頸壺 a	-	○	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
4		ハケ調整壺 a	-	○	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
5		甕	-	×	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
6		ハケ調整壺 a	-	○	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
7		底部	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
8		ミガキ甕	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
9		底部	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
10		ミガキ甕	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
11		外反口縁鉢	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
12		有棱高杯	-	-	×	○	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
13		高杯脚部	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	○	-
14		器台 a	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
15		広口壺 a	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
16		広口壺 a	-	○	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
17		ハケ調整壺 a	-	○	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
18		長頸壺	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
19		ミガキ甕	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
20		底部	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
21		ミガキ甕	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
22		直口鉢 d	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
23		高杯脚部	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
24		器台 a	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
25		広口壺 a	-	○	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	○	-
26		ハケ調整壺 a	-	○	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
27		長頸壺	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
28		ハケ調整壺 a	-	○	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
29		甕	-	×	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
30		ミガキ甕	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
31		底部	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
32		ミガキ甕	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
33		直口鉢 d	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
34	SK04上層	有棱高杯	-	-	○	○	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
35		高杯脚部	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
36		直口鉢 d	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	○	×	×	-
37		直口鉢 d	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	○	×	×	-
38		直口鉢 d	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	○	×	○	-
39		直口鉢 d	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	×	○	×	-
40		直口鉢 d	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
41		直口鉢 d	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
42		広口壺 a	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
43		広口壺 b	○	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	×
44		ハケ調整壺 a	-	○	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
45		甕	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
46		ハケ調整壺 a	-	○	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
47		甕	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
48		底部	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
49		ハケ調整壺 a	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
50		直口鉢 d	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
51		直口鉢 d	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
52	SD01	甕	-	○	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
53		直口壺	-	×	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
54		底部	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
55		無頸壺 a	-	×	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
56		ハケ調整壺 a	-	×	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
57	SD05 a	甕	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
58		直口鉢 d	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
59		直口鉢 d	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
60		直口鉢 d	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
61		直口鉢 d	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
62		直口鉢 d	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
63		直口鉢 d	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-

※指標5：仮に、体部の器壁の厚さが5mmを超える器、奥に○を付した。

※指標10：SK01・03・04、SD01・05a出土土器のうち、器体部外縁の調整が判明する18個体中、16個体にハケメ（89%）、3個体にハラミガキ（17%）が施される。ヘラミガキの及ぶ範囲はいずれも底部破片のみである（非実測側体部を含む）。

※指標11：SK01・03・04、SD01・05a出土土器のうち、器体部内面の調整が判明する24個体中、22個体にヘラケズリ（91%）、2個体にハケメ（8%）が施されている。ヘラケズリの及ぶ範囲については、概ね底部以下が18個体、口縁部との境以下が4個体である（非実測側体部を含む）。

※指標g：仮に、口径30cm以上の外反口縁高杯に○を付した。

※指標k：記号で示すことができないため、窓口縁端面の施文率を示す。SK01・03・04、SD01・05a出土土器のうち、口縁端面が判明する29個体中、25個体が無文、4個体に凹線文が施る（非実測側体部を含む）。

V期2段階の指標に一致した要素を検討する。指標c・gに一致する高杯(19・20・39)は、有稜高杯のうち口縁部が外反する型式であり、V期2段階以降に当地域で主流となる。当遺跡の高杯は、いずれも口縁部の外反度がきわめて小さいことから、V期2段階の東有年・沖田遺跡の堅穴住居1出土高杯(報告番号15)の先行型式であることは間違いない、指標c・gはV期2段階の指標から当面除外しておきたい¹¹。

なお、指標の出現頻度が様式差を示す可能性があると思われる甕内外面の調整の比率や、口縁端面の施文率については、表7の欄外に記したとおりである。比較可能な甕内外面の調整を見れば、V期1段階の小神辻の堂遺跡21-溝の出現頻度¹²に近いことが分かる。

壺及び甕の口縁の加飾が少ない等、型式学的に新しい様相を示すものの、当遺跡の弥生土器はV期1段階の範疇にあると考えられる。

なお、層位学的に新古の関係にあることが確実なSK04上層及び同下層出土の土器については、上層から広口壺が出土しておらず、下層に長頸壺や高杯を欠くという組成であり、直接的な比較が困難である。ただ、両者に共通する甕に有意な差異は認められない。また、SK01とSK04の間にも型式学的な有意な差はみられない。以上のことから、これらの資料はV期1段階の單一様式におさまるものと捉えられる。

2 地域的特徴の検討

最後に、西播磨の当該期の土器の地域的特徴を確認するため、当遺跡出土弥生土器の地域的様相を、前代の技術等の影響、畿内・中部瀬戸内地域の地域図として説明できる要素等に分けて確認する。

(1) 西播磨の中期土器の系譜のなかで把握できる要素

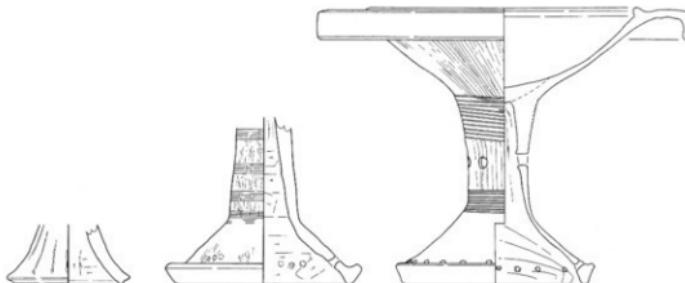
- ・広口壺a（1・25・42）は、吉備地域に通有の広口長頸壺とは明らかに異なる型式である。垂下口縁壺が主流である畿内にも類似の壺があるが、ここでは当地域の中期土器の後続型式と考えておく。
- ・4は、類例をみない器形の無頸壺aである。体部に巡るヘラ状工具による列点文は、当遺跡にあっては稀少である。この種の列点文は、後期初頭の吉備地域、中期の中部瀬戸内地域の土器にもみられる。他地域の影響なのか、古相をとどめるのかは特異な器形と相まって判断しがたい。なお、胎土分析の結果によれば、地元産の可能性が高い。
- ・10・58は、口縁部が強く折り返し、直立する立ち上がり部をもつ甕である。但馬地域の東山墳墓群（豊岡市、甕C I類）¹³や讃岐地域の上天神遺跡（高松市、報告番号798等）¹⁴に形態が類似した甕が一定の比率で存在するが、10・58は、中期の口縁を拡張する甕の中から発生した型式と捉えておく。
- ・18も、類例をみない器形の外反口縁鉢である。体部最大径の位置が異なるが、当地域の中期に存在する算盤玉形の体部をもつ鉢の流れで捉えることができる。なお、脚部はいわゆる近畿系とされるものである。
- ・V期1段階には、高杯裾端部の拡張が弱くなると言われ（指標9）、芝添遺跡においても、大半はその傾向にある（41など）が、21の裾端部は上方へ大きく拡張する。これは当地域の中期の高杯（亀

¹¹ 注8と同じ。

¹² 甕外面は、ハケあるいはハケナデが65.9%、ミガキが12.5%、甕内面は、ヘラケグリが100%とされる。

¹³ 瀬戸谷 晴・宮村良雄ほか 1992「上鉢山・東山墳墓群」豊岡市教育委員会

¹⁴ 財團法人香川県埋蔵文化財調査センター編 1995「上天神遺跡」香川県教育委員会・財團法人香川県埋蔵文化財調査センター・建設省四国地方建設局



第12図 高杯脚裾端部の比較（左・中：芝添遺跡41・21、右：亀田遺跡76）

田遺跡、報告番号76)¹⁵と大差なく、中期の土器製作技術の残存と捉えられる資料だが、仔細に見れば、器壁がかなり厚い点、据部と脚柱部の境が明瞭な点で中期のそれと異なっていることが指摘できる。

(2) 蔡内の地域圏のなかで把握できる要素

- ・すべての器種において、当地の中期土器に比して器壁が厚い。成形や調整が粗雑な土器もある(47)。備前、備中南部地域においても、当該時期の壺の器壁が厚みを増すといわれている¹⁶ため、畿内周辺に限定された現象ではない可能性もある。
- ・広口壺 b（垂下する口縁部をもつ壺）が1点（43）出土している。この胎土は生駒西麓のものではなく、地元産の可能性が高い。垂下口縁壺は、中期の生駒西麓産土器に特徴的な器種であったが、後期初頭には畿内を中心とした各地にこれが拡散することが指摘されており¹⁷、当遺跡もこの種の土器の分布域に含まれていることを示している。
- ・壺外縫の調整は、中期に盛行したヘラミガキ調整が少なく、ハケ等の一次調整にとどまる個体が多い。当該期の備中地域の壺の大半は、全面をハケ調整し下半をヘラミガキするもので¹⁸、明らかに様相を異にしている。
- ・中期に主流であった水平口縁高杯は見当たらず、浅い皿状の体部から屈曲して立ち上がる口縁をもつ有稜高杯のみ（36～38）となる。38は中部瀬戸内地域で主流を占めた高杯の搬入品である。36・37は、稜が甘く、口縁部も直立しないため、中期の楕円高杯の名残をとどめている。
- ・有稜高杯のうち、口縁がわずかに外反する高杯が存在する（19・20・39）。この種の高杯は中部瀬戸内地域には見られず、芝生遺跡大溝下層（高槻市）¹⁹、古曾部・芝谷遺跡（高槻市、報告番号34・108・337等）²⁰、中臣遺跡52次1号住居（京都市）²¹など、畿内各地に類例がある。

¹⁵ 高木芳史・深江英憲ほか 2000「亀田遺跡」兵庫県文化財調査報告 第210号

¹⁶ 平井典子 1992「弥生土器からみた備前・備中南部とその周辺」「吉備の考古学的研究（上）」山陽新聞社

¹⁷ 濱田延光 2001「畿内第Ⅳ様式の実像－西ノ辻N地点出土土器の再検討－」「ヒストリア」第174号、大阪歴史学会

¹⁸ 平井泰男 2002「備中南部における弥生時代中期後葉から後期前葉の土器編年」「環瀬戸内海の考古学－平井勝氏追悼論文集－」古代吉備研究会

¹⁹ 森田兌行 1990「揖津地域」寺沢 煙・森岡秀人編「弥生土器の様式と編年－近畿編Ⅱ－」木耳社、土器412

²⁰ 宮崎康雄 1996「古曾部・芝谷遺跡」高槻市文化財調査報告書20 高槻市教育委員会

²¹ 森岡秀人 1990「山城地域」寺沢 煙・森岡秀人編「弥生土器の様式と編年－近畿編Ⅱ－」木耳社、土器575

・鉢及び高杯の脚部（18・40）は、円筒状の脚柱部とハの字形に聞く据部からなる。

(3) 中部瀬戸内の地域圏のなかで把握できる要素

・壺の体部内面をヘラケズリする比率は全体の9割を越える。資料数が少ないものの、壺もほぼ同様の割合であり、体部内面の調整が判明する6個体のうちヘラケズリ調整は5個体である。備前・備中地域の壺では、ほぼすべての個体にヘラケズリを施すが、東方にある遺跡ほどその比率は低くなっている²²。

・高杯の脚部に、柳描文（21）や透かしの形変化した縦の刻線（41）を施すものがある。これらは、備前・備中・備後地域に広くみられる加飾である。

(4) 摂入品と思われる土器

・38は、後期初頭の高杯であり、高松平野西部の土を胎土とした²³ものと考えた。56は時期が判明しないが、後期初頭以降の所産である広口壺あるいは長頭壺の突出した底部であり、河内産と考えた。産地の判断はいずれも肉眼観察によるものであるが、胎土分析の結果によれば、38は讃岐産を否定できないが、比較資料がないため断定できず、56は地元産ではないが、河内産の可能性は高いといえないようである。

西播磨の後期初頭の土器の評価について、岸本は「播磨の土器編年上の中期と後期では、依然として明らかに太い線引きが可能であるものの、中部瀬戸内色が濃いまま後期に突入」し、後期中葉には畿内色に染まるとする²⁴。一方、中田は「後期前葉では、中部瀬戸内の様相と畿内的様相が器種毎に重層して認められることが大きな地域色」で、壺・高杯が前者、壺・鉢・器台などに後者の色彩が強いと述べた²⁵。

上記の検討の結果、当遺跡出土の弥生時代後期初頭の土器は、全体として中部瀬戸内の様相が強いとはいはず、また、中部瀬戸内地域と畿内の影響が、器種毎に分かれて発現する傾向も見られなかった。本稿では、前後の時期や周辺地域の状況を踏まえた体系的な把握はできなかったが、いくつかの地域的特徴を細別型式毎に提示してみた。

西播磨地域にあって、当該期の良好な土器を出土したのは、いまだ小神社の堂遺跡と芝添遺跡しかない。今後の資料の増加とともに、本稿で示した検討結果が、これから西播磨の土器編年研究の叩き台になれば幸いである。

第2節 総 括

芝添遺跡は大津茂川流域に立地する遺跡である。第2章で触れられている通り、芝添遺跡は馬山と城山に挟まれた東西200mの幅狭い谷底平野の完新世段丘面上に立地する。

東の馬山の丘陵据部には13基からなる6世紀中頃から7世紀初頭にかけての太市中古墳群が立地する。

²²注4文献

²³森下友子 1995「胎土1類土器について」「太田下・須川遺跡」香川県教育委員会・財團法人香川県埋蔵文化財調査センター・建設省四国地方建設局

²⁴注4文献

²⁵注5文献

同古墳群は平成5・6年度に一般国道29号改築事業に伴い、竪穴系横口式石室をもつ太市中4号墳発掘調査を含む12基の発掘調査が行なわれ、装飾付須恵器や馬具等の副葬品が出土している^㉙。この古墳群の母体となる集落は発見されていなかったが、今回、住居址は発見されなかつたものの、灌漑用の溝等が発見されたことにより、近隣に母体集落が存在していることが明らかとなった。

また、古墳時代の遺構とともに、弥生時代後期初頭の遺物を含む土坑群が発見されている。この土坑群のうち、特徴的なものとしてSK04に見られる方形の箱形土坑がある。SK03もその可能性が高いが、SK04は深さが60cmあり、残存状況はきわめて良好であった。当初は墓壙の可能性を考えたが、木棺の痕跡は認められず、底から出土した遺物は小破片状態のものであることから、その可能性はまずないと判断した。何よりも、ある程度埋没した段階でごみ捨て場として利用されていることは墓壙の可能性を否定している。管見ではこのような形状の遺構を見ないので、ここでは貯蔵穴と考えておき、今後の類例の増加を待ちたい。左記のように発見された弥生時代の遺構は土坑が中心で、住居址そのものは発見されていないが、集落址の一角であることは明らかである。大津茂川流域の弥生時代後期の遺跡として、当遺跡より南1kmに所在する亀田遺跡が知られるが、この亀田遺跡がピークを迎えるのは弥生時代中期後葉～末葉で、後期初頭は集落が衰退する時期にあたる^㉚。その北側に位置する芝添遺跡から、弥生時代後期初頭の土器群がまとまって出土したことは、亀田遺跡→芝添遺跡という大津茂川流域周辺集落の変遷が推測でき、弥生時代中期末葉から各地で始まった、母村集落の縮小・解体の流れの一端がこの集落からも垣間見られる。

今回の調査は県道拡幅部の限られた範囲であり、一部の遺構の検出にとどまつたが、周辺には弥生時代から古墳時代にかけての遺構が広がっていることは確実で、今後は芝添遺跡周辺の調査が期待される。

^㉙ 柏原正民ほか 2003『太市中古墳群』兵庫県文化財調査報告 第258冊

^㉚ 高木芳史・深江英憲ほか 2000『亀田遺跡』兵庫県文化財調査報告 第210冊

表 8 土器観察表

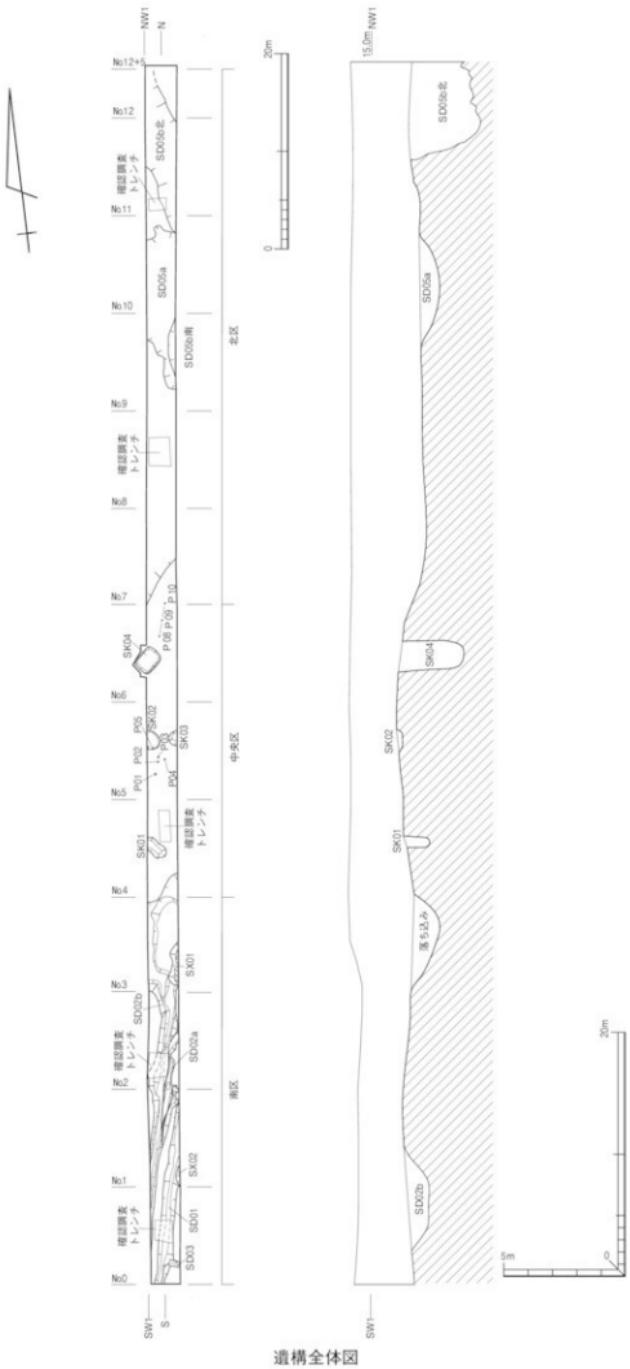
総合No.	図版	写真 回数	種別	器種	法量(cm)		外観	内面	口縁	底	他	出土 地区	出土遺構	実測No.		
					口径	高さ										
1	8	16	弥生土器	広口鋸齿	(16.2)	(4.75)	-	10YR6-2	10YR6-2	1/3	-	-	南区	SK01	39	
2	8	16	弥生土器	長頸壺	(8.55)	(5.2)	-	2,5YS/1	10YR6-1	1/4	-	-	南区	SK01	29	
3	8	16	弥生土器	長頸壺	(10.7)	(5.3)	-	2,5YS/2	2,5YS/2	1/4	-	-	南区	SK01	31	
4	8	16	弥生土器	無頸壺	(9.5)	11.1	5.1	7,5YR6/4	2,5YS/3	1/8	1/1	体部 1/8	南区	SK01	28	
5	8	16	弥生土器	無頸壺	(17.2)	(9.3)	被覆 (21.0)	2,5YS/1	2,5YS/1	小片	-	-	南区	SK01	30	
6	8	16	弥生土器	壺	(15.0)	(3.5)	-	2,5YS/1	2,5YS/2	1/2	-	-	南区	SK01	26	
7	8	16	弥生土器	壺	(15.4)	(5.6)	-	2,5YS/2	2,5YS/2	1/4	-	-	南区	SK01	33	
8	8	16	弥生土器	壺	(16.9)	(14.4)	被覆 (17.0)	2,5YS/1	2,5YS/1	小片	-	体部 1/5	南区	SK01	21	
9	8	16	弥生土器	壺	(18.0)	(6.7)	-	2,5YS/2	10YR8/1	1/4	-	-	南区	SK01	34	
10	8	17	弥生土器	壺	(14.3)	(6.7)	-	2,5YR6/2	2,5YR6/8	小片	-	-	南区	SK01	27	
11	8	17	弥生土器	壺	(13.5)	(8.6)	-	2,5YR6/2	2,5YR7/2	1/12	-	体部 1/6	南区	SK01	22	
12	8	17	弥生土器	壺	(14.3)	(10.0)	-	2,5YR6/2	2,5YR7/2	1/2	-	-	南区	SK01	25	
13	8	17	弥生土器	壺	(14.8)	(8.6)	(6.0)	10YR7/2	2,5YR7/2	1/2	-	-	北区	SK01	41	
14	8	17	弥生土器	壺	-	(4.5)	(4.7)	SYR6-6	SYR6-6	1/2	-	-	南区	SK01	40	
15	8	17	弥生土器	底部	-	(5.3)	(5.1)	N/A	-	1/2	-	-	南区	SK01	35	
16	8	17	弥生土器	底部	-	(2.5)	5.2	2,5YR7/3	NR/	-	1/1	-	南区	SK01	23	
17	8	17	弥生土器	壺	-	(4.2)	8.0	2,5YS/1	10YR6/4	-	1/2	-	南区	SK01	24	
18	8	14	弥生土器	鉢	19.5	24.0	14.4	2,5YS/1	2,5YR7/2	1/3	-	脚 1/12	南区	SK01	71	
19	8	17	弥生土器	高杯	(23.5)	(3.9)	-	10YR7/2	SYR6-6	小片	-	-	南区	SK01	32	
20	8	17	弥生土器	高杯	(27.5)	(12.7)	-	10YR7/2	2,5YS/2	小片	-	脚部小片	南区	SK01	38	
21	8	15	弥生土器	高杯脚部	-	(13.7)	(13.8)	被覆	2,5YS/1	10YR8/2	-	-	脚部 1/4 ~	南区	SK01	42
22	8	14	弥生土器	高杯脚部	-	(16.0)	-	2,5YS/1	10YR8/2	-	-	脚部 1/2	南区	SK01	37	
23	8	14	弥生土器	格子	(22.4)	(7.2)	-	SYR7/4	2,5YS/7	1/2	-	-	南区	SK01	36	
24	8	18	弥生土器	広口壺	(18.6)	(3.2)	-	10YR4/1	10YR7/4	小片	-	-	南区	SK02	43	
25	8	18	弥生土器	広口壺	(14.8)	(7.7)	-	10YR8/1	10YR8/1	1/2	-	-	南区	SK03	68	
26	8	14	弥生土器	壺	15.8	(15.0)	-	2,5YR6/7	2,5YR7/6	2/3	-	体部 1/3	南区	SK03	69	
27	9	18	弥生土器	長頸壺	(12.3)	(5.2)	-	2,5YS/2	2,5YS/7	1/7	-	-	北区	SK04(上層)	67	
28	9	18	弥生土器	長頸壺	(16.2)	(5.2)	-	2,5YS/2	2,5YS/7	1/7	-	-	北区	SK04(上層)	65	
29	9	18	弥生土器	長頸壺	(13.0)	(5.0)	-	2,5YS/1	10YR7/1	1/9	-	-	北区	SK04(上層)	59	
30	9	18	弥生土器	壺	(15.0)	(7.4)	-	10YR8/2	10YR8/4	1/9	-	脚部 1/4	北区	SK04(上層)	45	
31	9	18	弥生土器	壺	(21.0)	(3.4)	-	10YR8/2	SYR6/5	1/16	-	-	北区	SK04(上層)	44	
32	9	18	弥生土器	底部	-	(7.9)	(10.0)	10YR7/2	2,5YS/1	-	小片	-	北区	SK04(上層)	52	
33	9	14	弥生土器	底部	-	(11.1)	(6.9)	8.9	SYR6/6	2,5YS/1	-	1/1	-	北区	SK04(上層)	70
34	9	18	弥生土器	壺	-	(5.6)	(6.9)	10YR4/1	2,5YS/2	-	-	1/4	北区	SK04(上層)	54	
35	9	18	弥生土器	口直部	-	(19.9)	(7.0)	-	10YR7/2	10YR7/2	1/12	-	-	北区	SK04(上層)	51
36	9	18	弥生土器	高杯	(19.8)	(4.7)	-	N/A	N/A	1/6	-	-	北区	SK04(上層)	66	
37	9	18	弥生土器	高杯	(15.5)	(4.7)	-	2,5YS/3	10YR7/2	-	-	-	北区	SK04(上層)	57	
38	9	18	弥生土器	高杯	(20.0)	(3.9)	-	SYR6-5	SYR6-5	1/8	-	受部 1/4	北区	SK04(上層)	48	
39	9	18	弥生土器	高杯	(30.1)	(4.9)	-	SYR6/8	10YR7/2	1/12	-	-	北区	SK04(上層)	47	
40	9	19	弥生土器	高杯脚部	-	(2.6)	-	10YR7/3	2,5YS/8	-	-	脚部 1/4	北区	SK04(上層)	53	
41	9	19	弥生土器	高杯脚部	-	(4.9)	(8.5)	被覆	2,5YS/1	2,5YS/1	-	脚部 1/6	北区	SK04(下層)	49	
42	9	19	弥生土器	広口壺	(17.3)	(4.6)	-	2,5YS/1	10YR6/2	-	-	-	北区	SK04(下層)	57	
43	9	19	弥生土器	広口壺	(19.7)	(3.0)	-	10YR8/4	10YR8/1	1/20	-	-	北区	SK04(下層)	55	
44	9	19	弥生土器	壺	(17.5)	(16.4)	-	被覆	2,5YS/1	2,5YS/2	小片	-	体部 1/2	北区	SK04(下層)	56
45	9	19	弥生土器	壺	(16.0)	(8.9)	-	2,5YS/1	2,5YS/1	1/4	-	-	北区	SK04(下層)	61	
46	9	19	弥生土器	壺	(16.8)	(12.7)	-	被覆	2,5YS/1	2,5YS/1	1/3	-	体部 1/3	北区	SK04(下層)	60
47	9	18	弥生土器	壺	(11.4)	(9.7)	(10.9)	10YR7/2	2,5YS/1	1/2	-	体部 1/2	北区	SK04(下層)	58	
48	9	19	弥生土器	底部	-	(5.0)	(4.8)	10YR8/2	NR/	-	1/2	-	北区	SK04(下層)	63	
49	9	19	弥生土器	底部	-	(5.0)	(4.8)	10YR8/2	2,5YS/1	-	1/2	-	北区	SK04(下層)	59	
50	9	20	弥生土器	底部	(15.2)	(7.5)	(3.8)	SYR8/1	10YR8/1	1/12	1/4	-	北区	SK04(下層)	64	
51	9	20	弥生土器	底部	(12.2)	(6.0)	(6.0)	10YR8/2	10YR8/2	1/2	-	-	北区	SK04(下層)	62	
52	10	20	弥生土器	壺	(16.5)	(6.8)	-	2,5YS/1	2,5YS/1	1/4	-	-	南区	SK01	9	
53	10	15	須恵器	杯盤	15.1	4.7	-	NR/	N/T	1/7	-	-	南区	SK01	1	
54	10	15	須恵器	杯盤	12.6	4.3	-	NR/	N/T	2/3	2/3	-	南区	SK01	2	
55	10	20	弥生土器	直口壺	(14.2)	(8.5)	-	10YR8/3	10YR8/2	1/3	-	-	北区	SD05a	15	
56	10	20	弥生土器	直口壺	-	(2.9)	(7.2)	10YR8/3	10YR8/2	-	1/2	-	北区	SD05a	16	
57	10	15	須恵器	杯盤	8.8	3.6	2,5YS/1	2,5YS/1	2,5YS/1	-	-	北区	SD05a	8		
58	10	20	弥生土器	直口壺	(13.4)	(6.1)	-	SYR6-5	10YR7/3	1/4	-	-	北区	SD05a	12	
59	10	20	弥生土器	直口壺	(18.6)	(3.0)	-	2,5YS/4	10YR7/4	1/12	1/2	-	北区	SD05a	13	
60	10	15	須恵器	壺	(15.4)	(8.9)	-	2,5YS/2	2,5YS/2	1/2	-	脚部 1/2	北区	SD05a	14	
61	10	20	弥生土器	直口壺	(13.3)	(9.2)	(5.3)	2,5YS/2	2,5YS/1	1/4	1/2	体部 1/4	北区	SD05a	17	
62	10	15	須恵器	高杯脚部	-	7.4	7.4	2,5YS/1	N/T	-	-	脚部 1/3, 脚柱	北区	SD05a	19	
63	10	15	土師器	高杯脚部	-	(7.5)	(10.1)	SYR8/4	7,5YR7/4	-	-	脚部 6/7	北区	SD05a	20	
64	10	21	須恵器	杯盤	(13.2)	(3.5)	-	N/T	N/T	1/6	-	-	北区	SD05b	6	
65	10	21	須恵器	杯盤	(2.9)	(9.6)	2,5YS/1	2,5YS/1	N/T	1/4	-	北区	SD05b	4		
66	10	21	須恵器	壺	(18.4)	(6.3)	-	NR/	N/T	1/8	-	-	北区	SD05b	3	
67	10	15	土師器	壺	(28.5)	(14.6)	-	10YR7/1	10YR8/2	1/4	-	-	北区	SD05b	11	
68	10	15	土師器	壺	-	26.7	(20.9)	2,5YS/3	2,5YS/3	-	1/2	体部 1/2	北区	SD05b	10	
69	10	20	弥生土器	付台脚	-	(2.4)	(4.2)	2,5YS/1	2,5YS/2	-	-	脚部 1/2	北区	包食層	8	
70	10	21	須恵器	杯盤	(15.4)	(1.5)	-	2,5YS/1	N/T	1/12	-	-	北区	包食層	7	
71	10	21	須恵器	壺	-	(1.5)	(7.8)	NR/	NR/	-	1/6	-	北区	包食層	5	

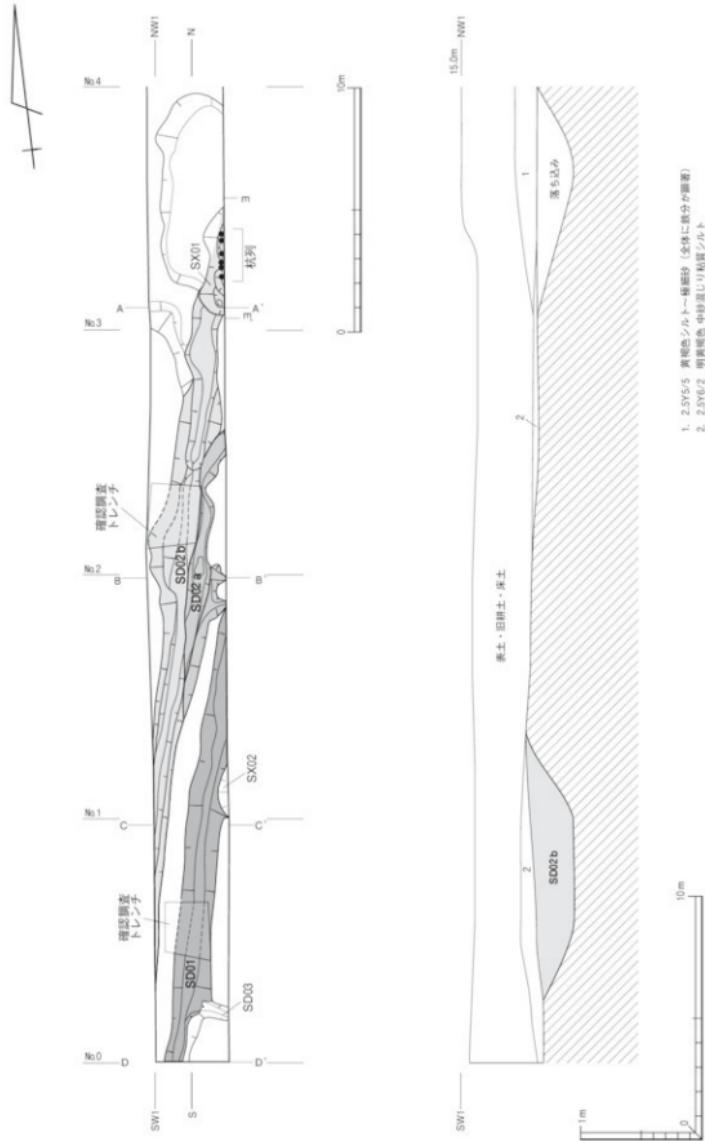
※高さの()は残存値、その他の()は復元値

表 9 石製品・木製品観察表

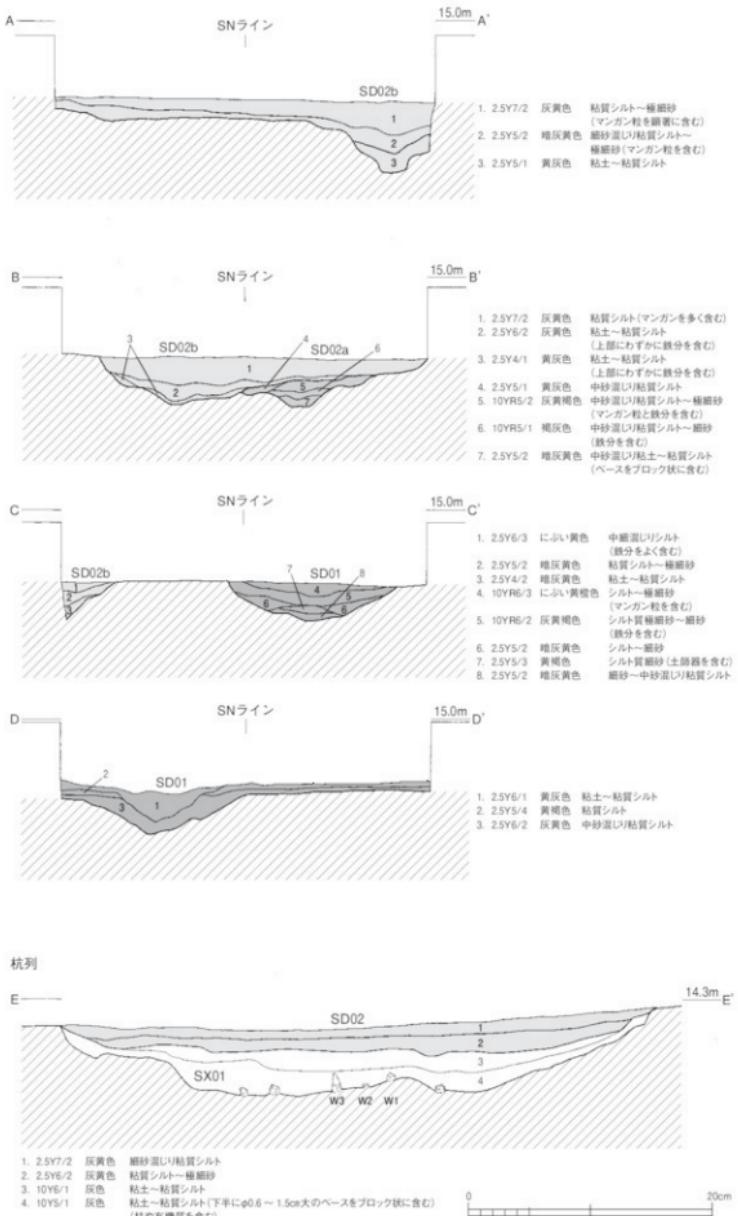
総合No.	図版	写真 回数	種別	器種	材質	法量(cm)			出土 地区	出土遺構	実測No.
						長さ	幅	厚み			
S01 第5図	21	石製品	刀柄	サヌカイト		8.8	3.85	1.1	-	-	S01
W01	10	21	木製品	杖	アカガシ属か(未同定)	(45.5)	7.3	5.5	-	-	W01
W02	10	21	木製品	杖	アカガシ属か(未同定)	(34.6)	6.7	4.9	-	-	W02
W03	10	21	木製品	杖	広葉樹(未同定)	(20.9)	5.6	5.6	-	-	W03

図 版

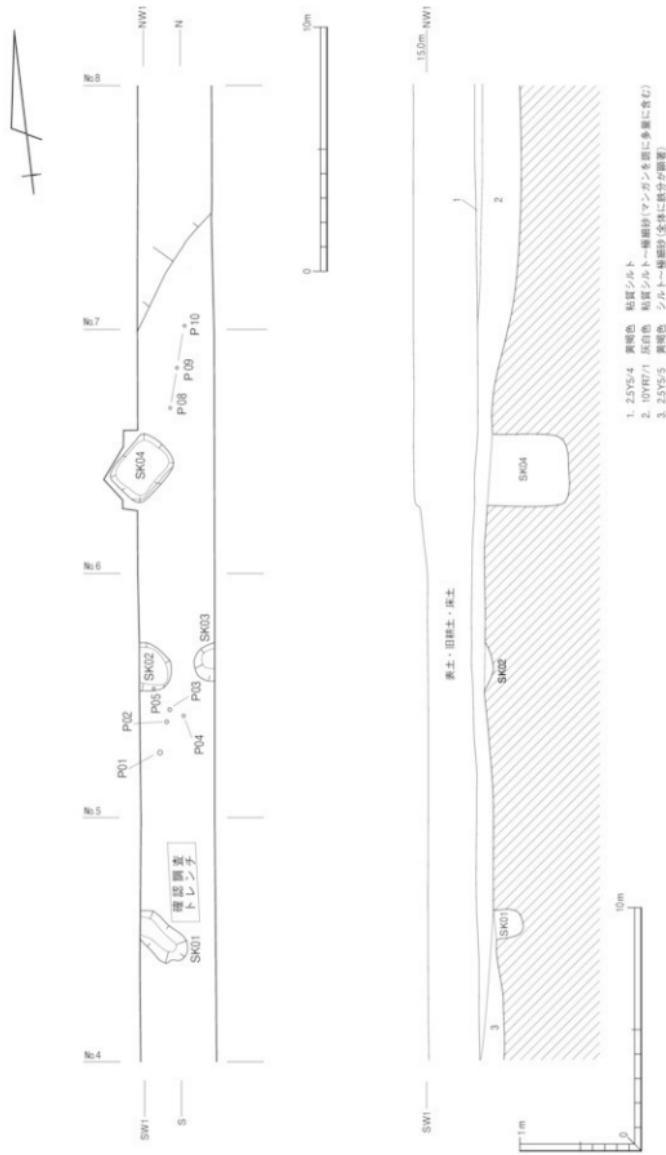


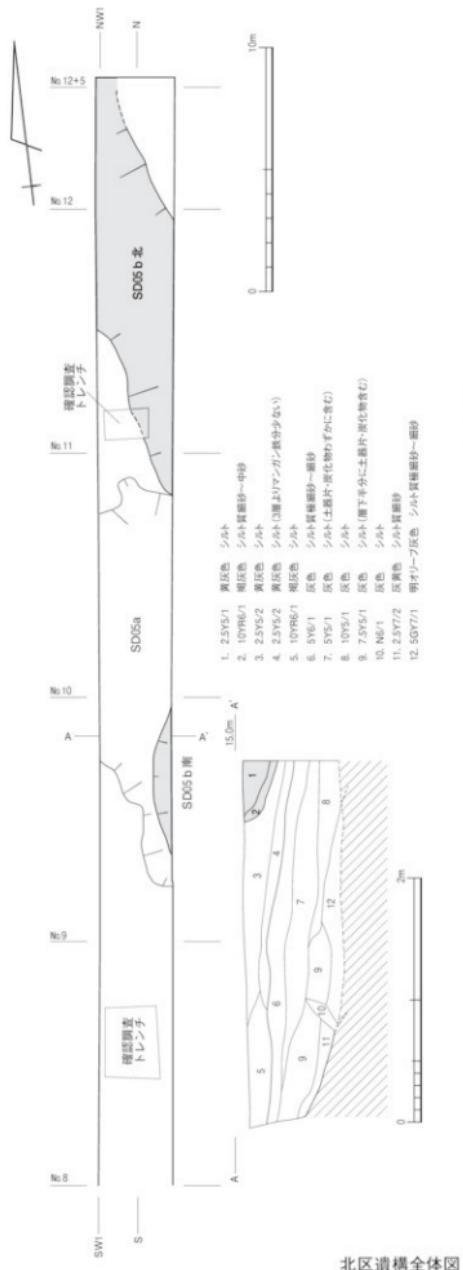


南区遺構全体図

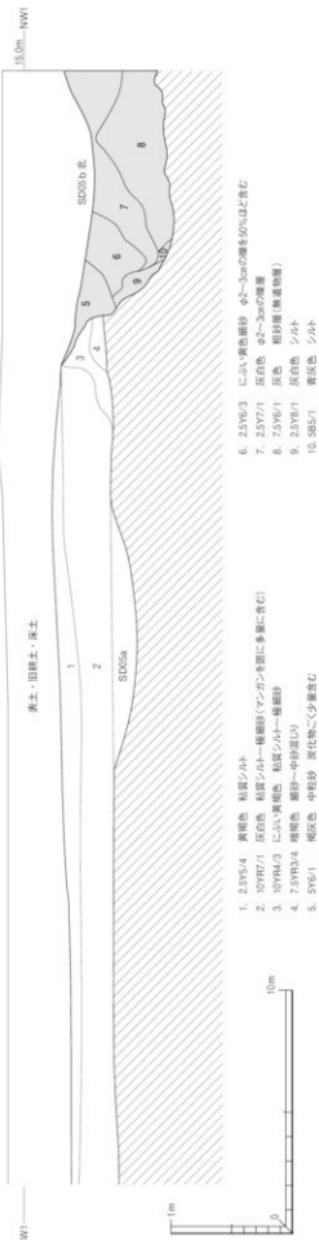


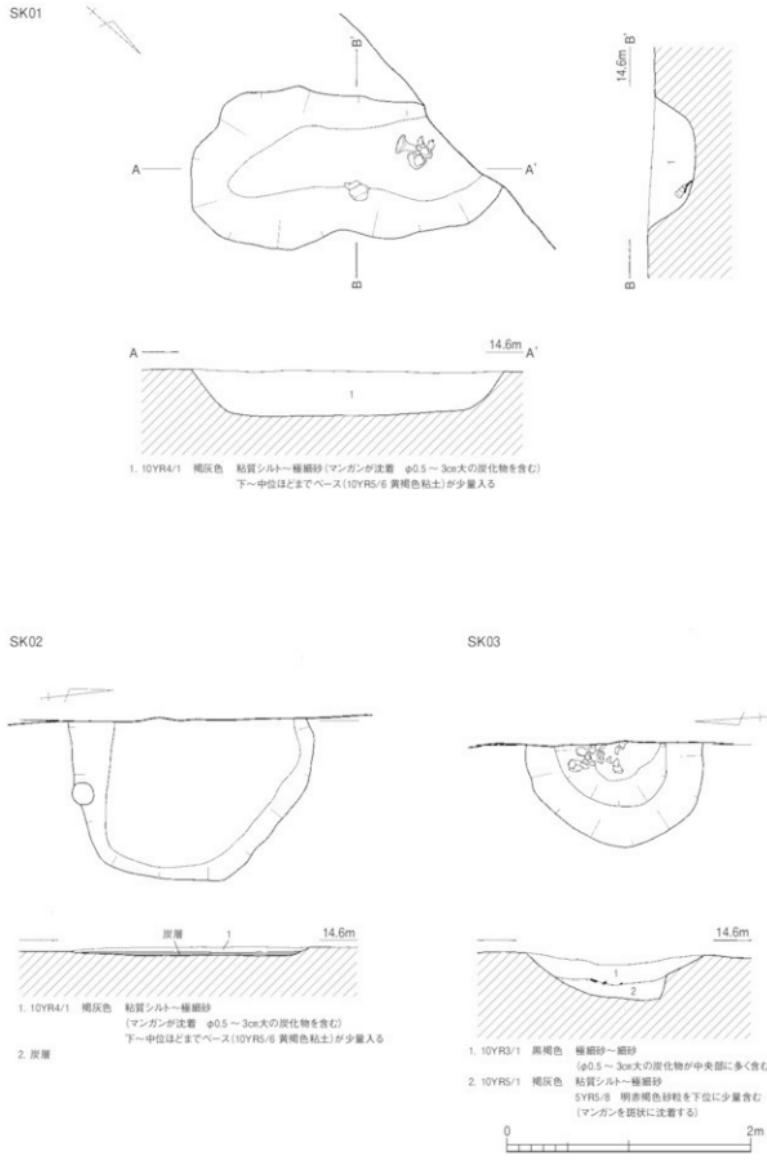
SD01・02断面図





北区遺構全体図



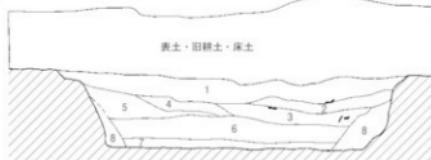


SK01～03遺構図

SK04上層

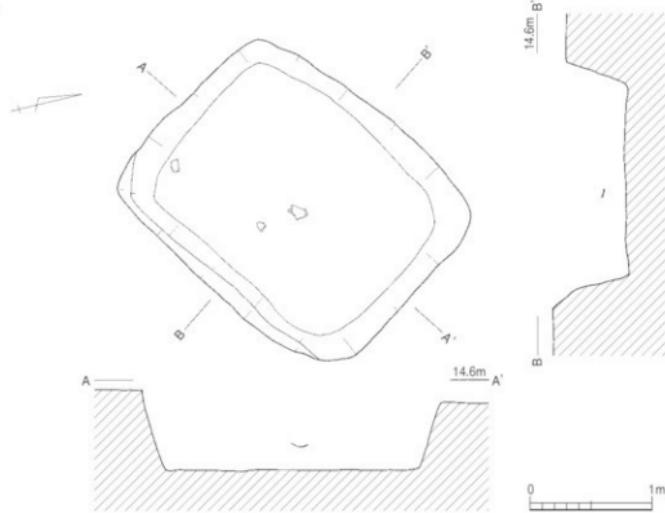


15.1m



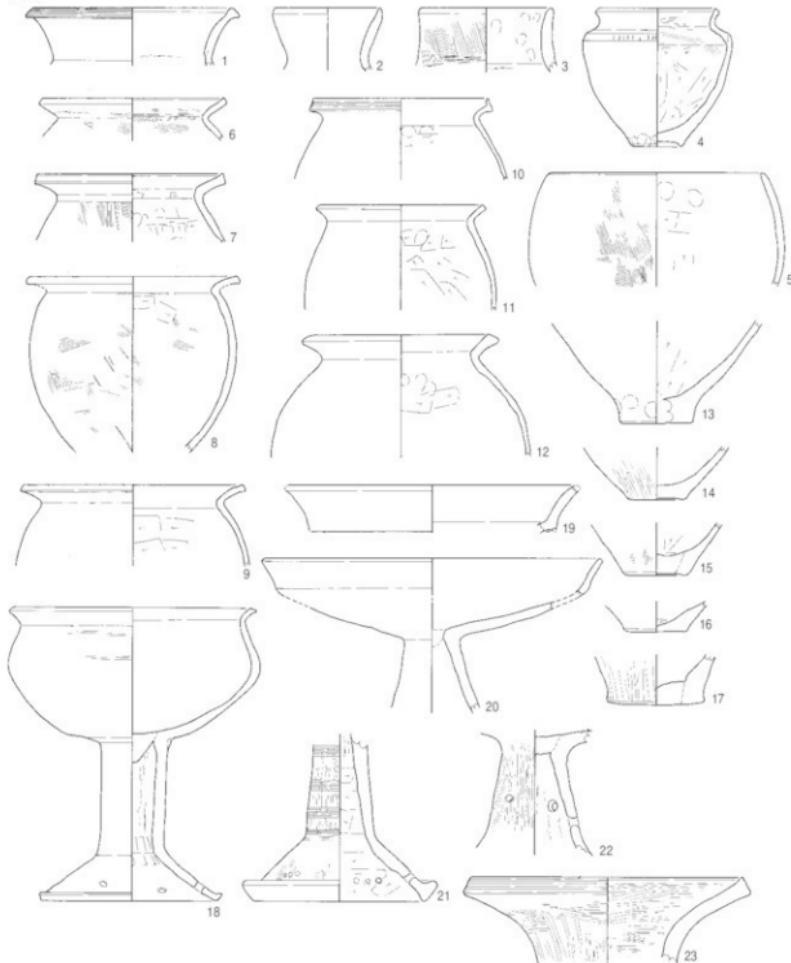
- | | | | | | |
|-------------|------|-------------------|-------------|-----|---------------------------|
| 1. 10YR4/1 | 褐色 | 細砂～中粒砂混じり | 6. 7.5YR4/4 | 褐色 | 極細砂～細砂 中粒砂混じり |
| 2. 10YR5/2 | 灰黄褐色 | 極細砂～細砂 | 7. 7.5YR4/6 | 褐色 | （マニガン粒、鉄分が斑状に沈着する） |
| 3. 10YR3/2 | 深褐色 | 粘質シルト～極細砂 | | | 粘質シルト～細砂 |
| 4. 10YR3/1 | 深褐色 | （上位に鉄分多く、下位は粘性強い） | | | （△1~3cmの大さの炭化物を含む。遺物を含む） |
| 5. 7.5YR3/2 | 深褐色 | 極細砂～細砂 | 8. 7.5YR3/3 | 暗褐色 | 7.5YR4/1 暗褐色粘土を斑状に含む |
| | | （赤色鉄をわざかに含む） | | | 粘質シルト～細砂 |
| | | （マニガンが多量に沈着する） | | | （上層より赤褐色を多く含む。鉄分が斑状に沈着する） |

SK04下層



SK04遺構図

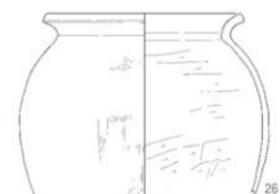
SK01



SK02



SK03

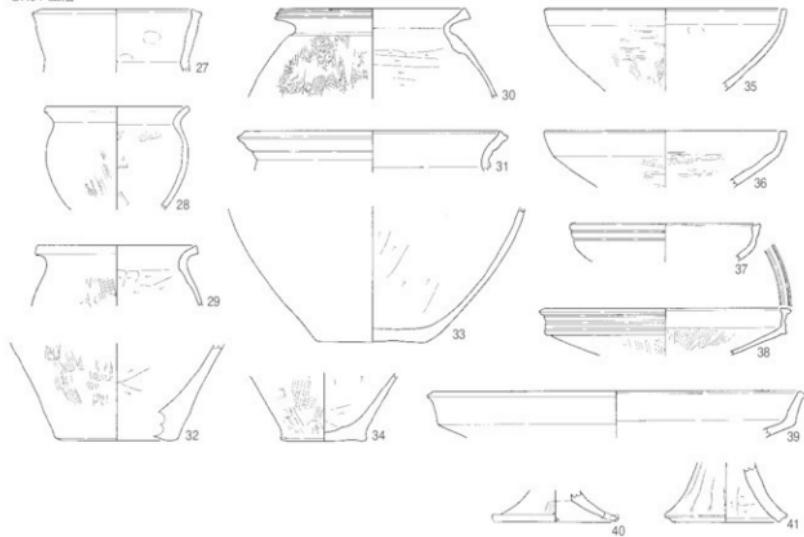


0

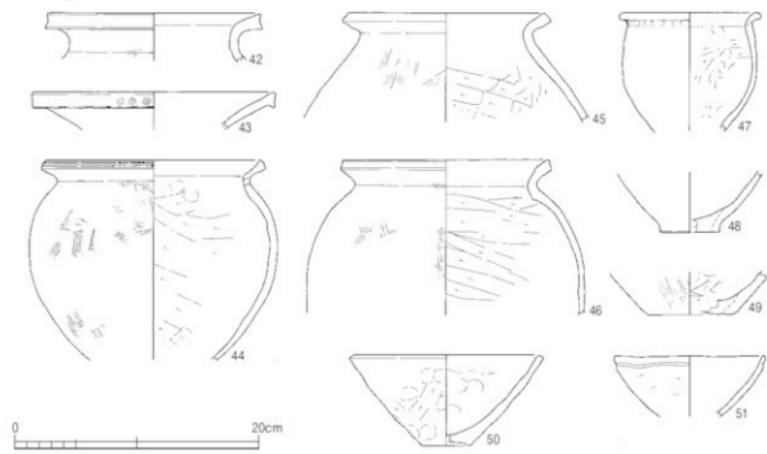
20cm

SK01~03出土土器

SK04 上層

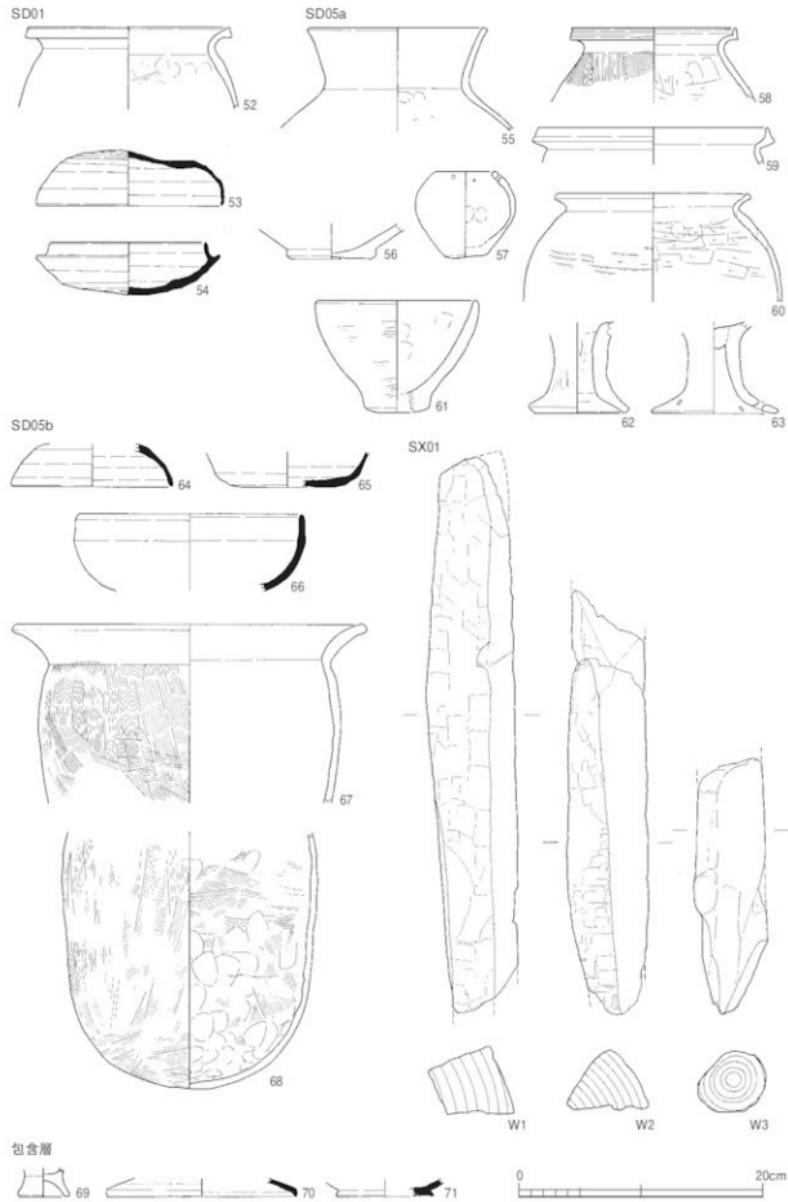


SK04 下層



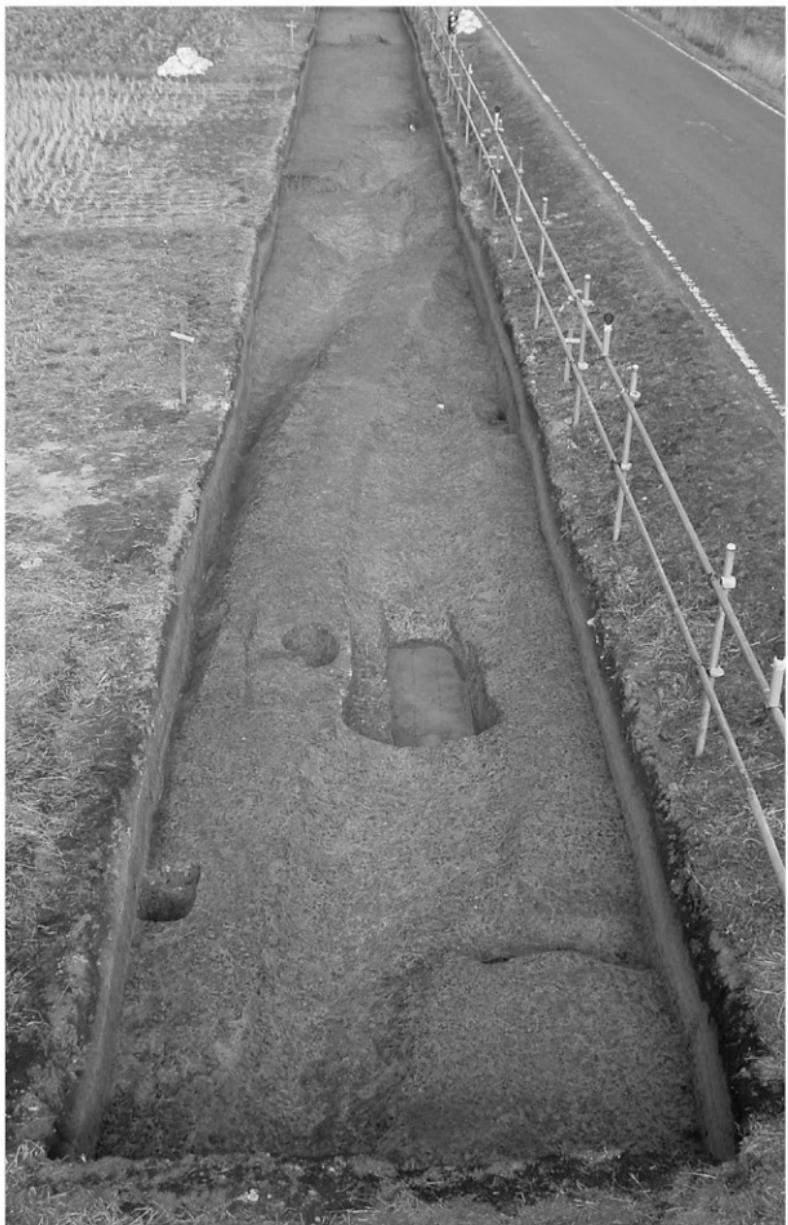
0 20cm

SK04出土土器



溝等出土遺物 (SD・SX・包含層)

写 真 図 版



南区全景（南から）



a) SD01 遺物出土状況（北から）



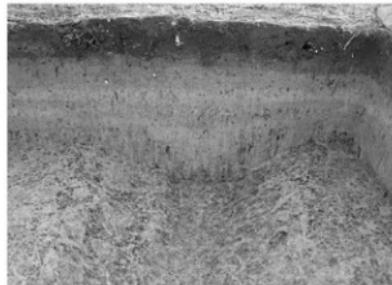
b) SD01 遺物出土状況（南から）



c) SD03 土層（南から）



d) SD01・02b 土層C（南から）



e) No. 0 南壁 土層断面



f) SD02a・b 土層B（南から）



a) SD02 b 土層A（北から）



b) SX01 (北西から)



c) SX01 (西から)



中央区北半～南区全景（北から）



a) SK01 遺物出土状況（南西から）



b) SK01 遺物出土状況（南から）



c) SK02 (東から)



a) SK03上層 遺物出土状況
(西から)



b) SK03上層 遺物出土状況
(西から)



c) SK03下層 完掘状況
(西から)



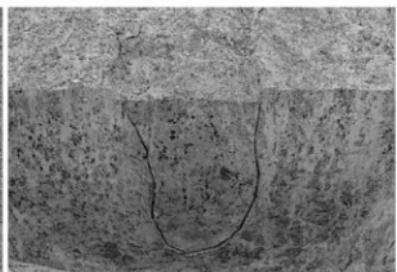
中央区北半～北区全景（南から）



a) ピット列 P08～P10検出状況（北から）



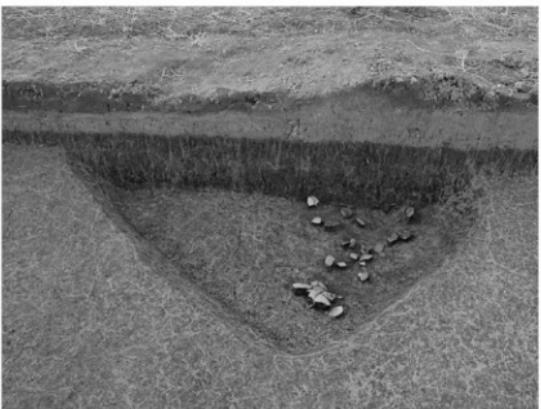
b) P02・03 断割り（東から）



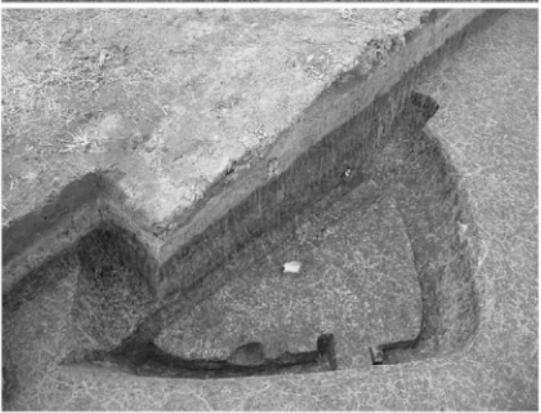
c) P01 断割り（東から）



d) P04 断割り（東から）



a) SK04 上層遺物出土状況
(東から)



b) SK04 下層遺物出土状況
(南東から)



c) SK04 床面遺物出土状況
(西南から)



a) SK04 完掘状況（東から）



b) SK04 完掘状況（北東から）



SD05a・b 完掘状況（北から）



a) SD05b 完掘状況
(北から)



b) SD05b 完掘状況
(南から)



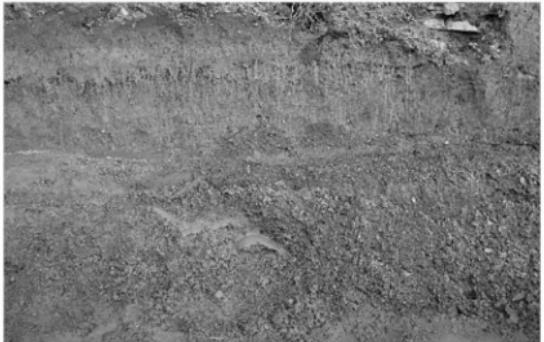
c) SD05 遺物出土状況
(北から)



a) SD05b 完掘状況（南から）



b) SD05b 遺物出土状況
(東から)



c) SD05b 東壁土層
(西から)

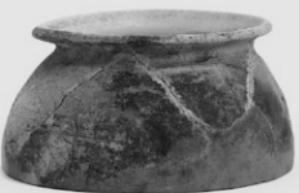




53



54



60



57



62



63

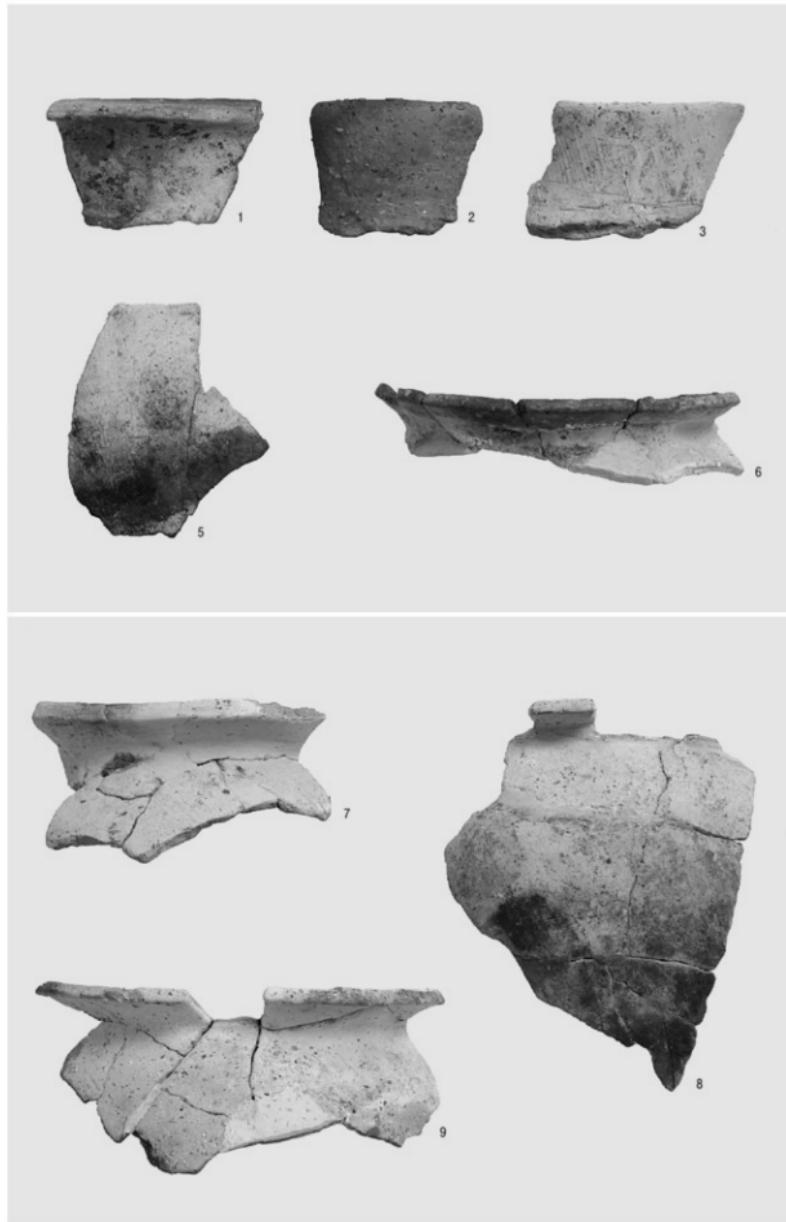


67

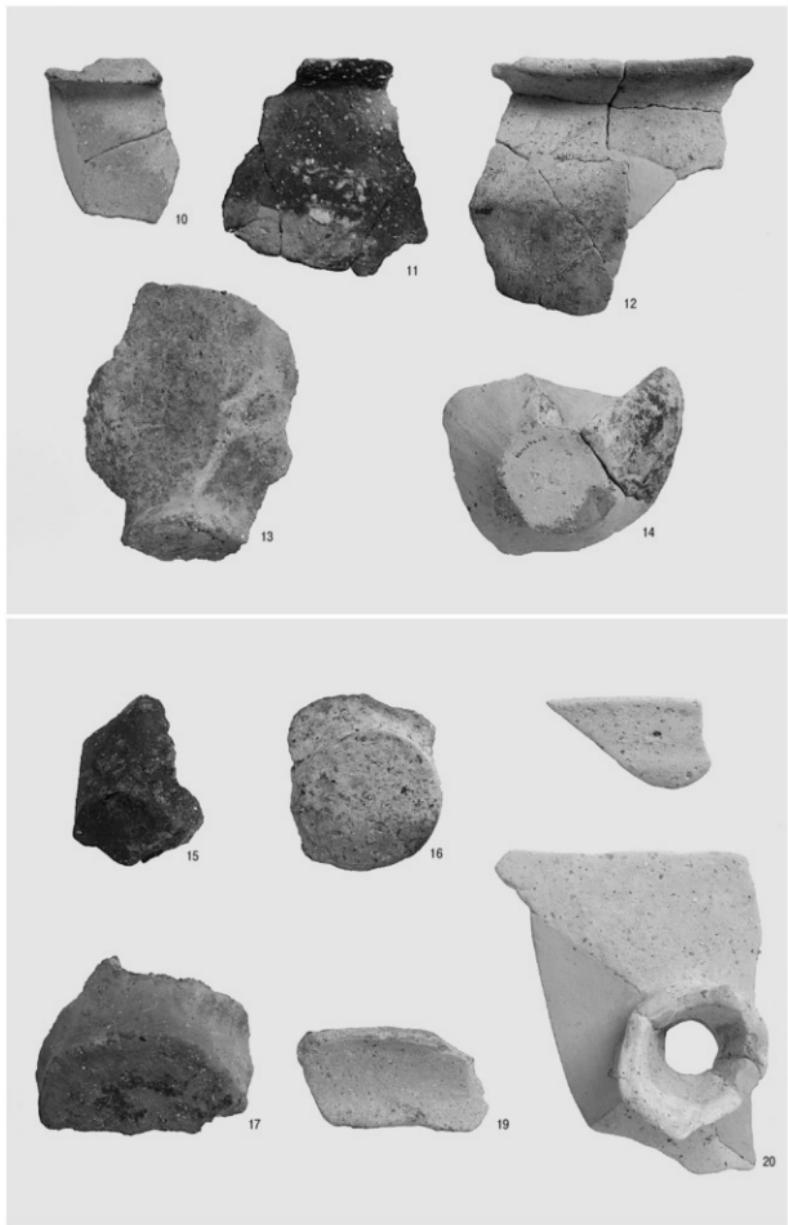


68

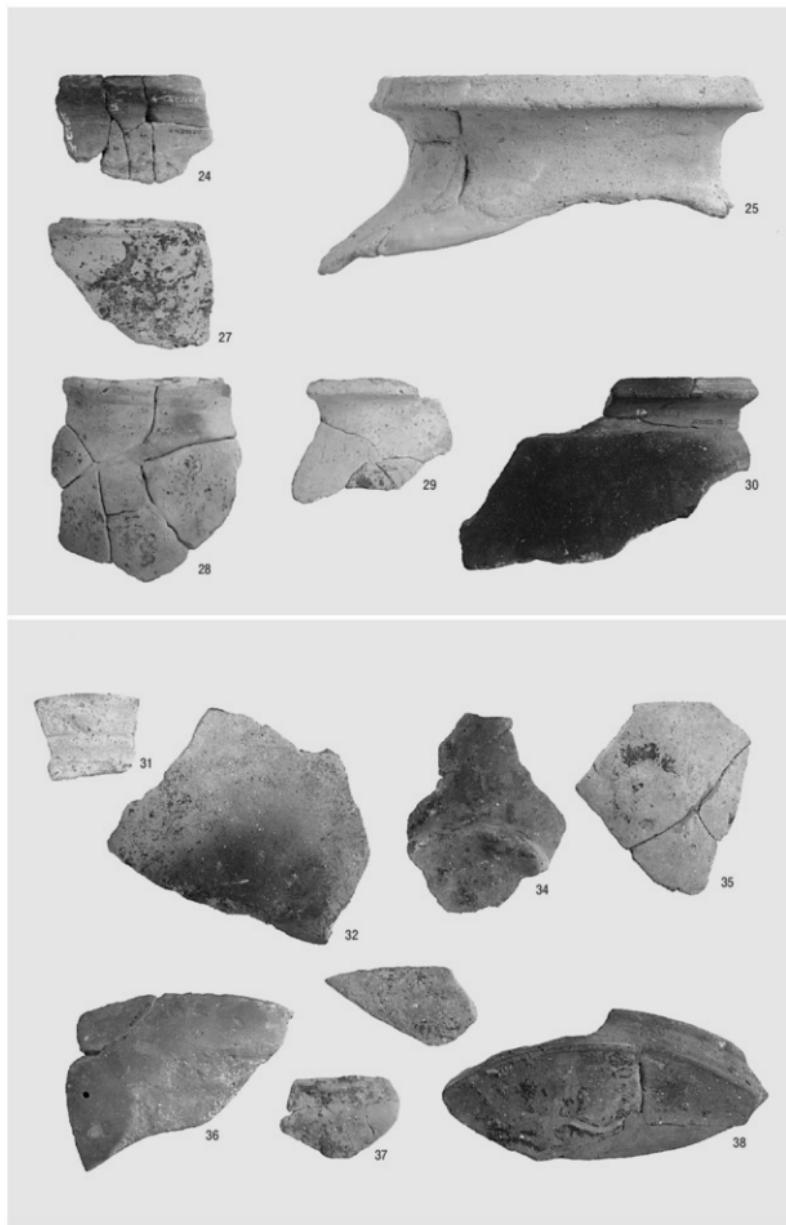
SD01・SD05a・SD05b 出土土器



SK01 出土土器



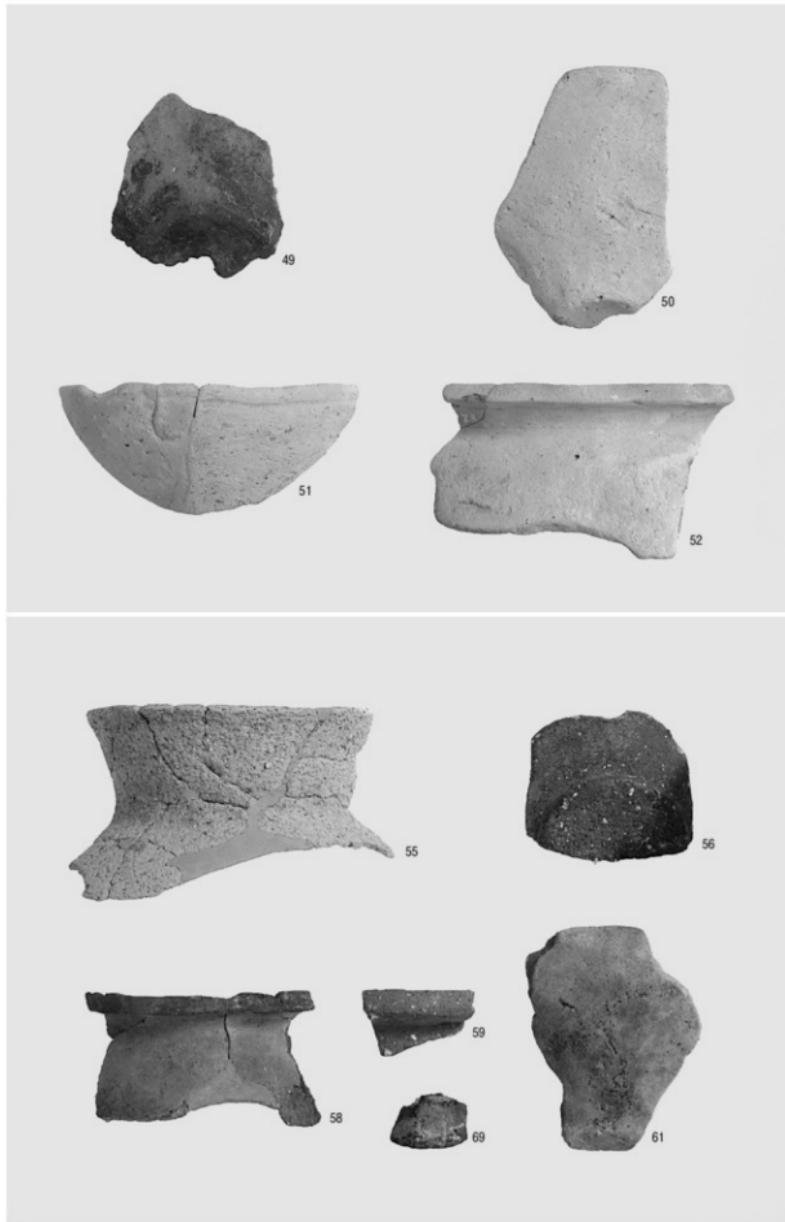
SK01 出土土器



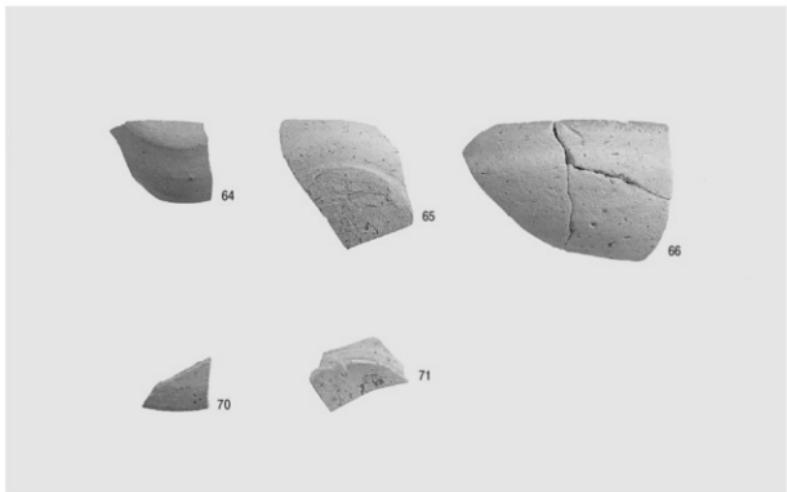
SK02・SK03・SK04 上層出土土器



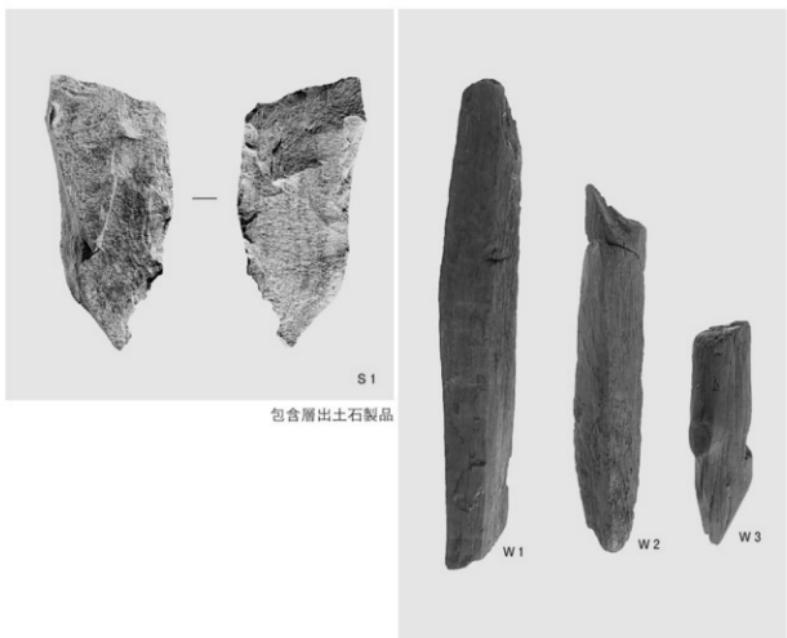
SK04 上層・SK04 下層出土土器



SK04下層・SD01・SD05a・包含層出土土器



SD05b・包含層出土土器



包含層出土石製品

SX01 出土木製品

報 告 書 抄 錄

兵庫県文化財調査報告 第447冊
姫路市

芝添遺跡

——(一)石倉太子線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書——

平成25(2013)年3月28日 発行

編集：公益財團法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部

〒675-0142 兵庫県加古郡播磨町大中1丁目1番1号(兵庫県立考古博物館内)
発行：兵庫県教育委員会

〒650-8567 兵庫県神戸市中央区下山手通5丁目10番1号
印刷：福田印刷工業株式会社

〒658-0026 神戸市東灘区魚崎西町4丁目6番3号
